

## 評伝 矢内原忠雄 (九)

### A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 9)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

#### 第九章 暗い時代を生きる

##### 一 「真理の敵」との闘い

時代は急速に右傾化・ファッショ化の道を歩みはじめた。ドイツでヒットラー率いるナチスが政権を取ったのは、一九三三(昭和八)年一月である。日本は中国で熱河作戦を展開し、英米中心のワシントン体制を嫌い、国際連盟脱退という拳に出た。国内では前章で扱った京大事件が起こっていた。一高入学の年、南寮十番で一緒だった恒藤恭(井川恭)が、気骨ある態度を示した事件である。恒藤恭は文部省の強引な大学人事への介入に最後まで反対し、辞任し

た七名の教授の一人であった。

京大事件は対岸の火事では終わらなかった。東京帝国大学関係では、一九三五(昭和一〇)年二月、まず、前年まで教授で、当時貴族院議員となっていた美濃部達吉の天皇機関説が右翼から攻撃される。天皇機関説とは、国家の統治権は法人である国家にあり、天皇はその最高機関であるとする学説で、大日本帝国憲法(明治憲法)の解釈として画期的なものがあつた。が、統治権は天皇一人にあるとする天皇主権説を唱える上杉慎吉らと対立し、右翼代議士(貴族院議員)菊池武夫からは、本会議で国体に反する学説、「美濃部は学匪」と攻撃された。結局美濃部は不敬罪で告訴され、貴族院議員を辞職、その著書は絶版に追い込まれる。菊池は軍人出身(元陸軍中将)の代議士で、京大事件の際には、瀧川幸辰の『刑法読本』と『刑法講義』を危険思想であると攻撃した人物である。

瀧川幸辰の京大事件、美濃部達吉の天皇機関説事件は、まず、時流に乗った右翼の国粹主義学者の論文が、時の権力者に利用されるという道をたどって展開した。右翼の思想家は、安易な論法で、時の政府に都合の悪い学者を攻撃することで名を成していった。その代表が蓑田胸喜という、超国家主義に立つ右翼の人物であった。蓑田は一八九四(明治二七)年一月二十六日、熊本県八代郡氷川町の生まれ。矢内原忠雄より一歳若い。熊本県立八代中学校、第五高等学校を経て東京帝国大学文科大学を一九二〇(大正九)年に卒業。さらに法学部政治学科に編入学(学士入学)したが、中途退学している。のち慶應義塾大学予科の講師、国士館専門学校教授となり、師事した三井甲之と共に『原理日本』(一九二五・一一創刊)という雑誌を刊行、原理日本社を主宰した。

なお、蓑田胸喜に関しては、竹内洋『大学という病 東大紛擾と教授群像』に詳しい。また、竹内洋ほか編『蓑田胸喜全集』全七卷(柏書房、二〇〇四・一一)があることも記しておこう。近年の中公新書の一冊、将基面貫巳『言論抑圧 矢内原事件の構図』も蓑田胸喜にかのりのページを割く。なお、この本の限界、危険性に関しては、後で詳しく述べる。蓑田は当時雑誌『原理日本』で、著名な学者を次々と攻撃し、失脚させたり、著書を発売禁止に追い込むことに情熱を傾けていた。

『原理日本』が標的とした学者は、東京帝大法学部の末弘厳太郎・美濃部達吉・横田喜三郎・田中耕太郎・宮澤俊義・矢部貞治・南原繁らであり、経済学部では大内兵衛・河合榮治郎、そして矢内原忠雄であった。他にも京都帝国大学の瀧川幸辰・西田幾多郎・田辺元、法政大学の三木清、早稲田大学の津田左右吉などが槍玉に挙げ

られた。こうして書き並べると、皆リベラルな学者や批評家である。時流というものは恐いものである。時流に乗るのも、逆らうのもそれなりの覚悟があるからである。蓑田胸喜は時流に乗り、右のリベラルな学者や批評家は、時流に逆らったと言える。この場合乗るはやすく、逆らうは難かった。時流に乗った雑誌『原理日本』は、「軍部の資金が相当つき込まれていた」とは、右の竹内洋の著書や近年の鴨下重彦の言である。

矢内原忠雄は満洲事変以後の時代の重圧の中でも、自身の学問的主張を曲げずに研究に励む。むろん厳しい言論統制の下では表現の自由などないから、検閲というばかげた制度を切り抜けるための表現上の工夫はしている。例えば忠雄の回想「戦の跡」には、「当時に言論の自由がいちじるしく束縛せられていたため、「日本帝国主義」と言ふべきところを「日本帝国発展主義」と記す等、表現上に苦心を払つてゐる」とある。内務省(一八七三年設置、一九四七年廃止)の検閲という表現の自由の制限は、苛烈を極めていた。近代日本の良心的知識人——文学者や思想家は、皆、検閲との闘いを経験している。範囲を一九一〇(明治四三)年九月一高入学の忠雄の仲間にしぼってもよい、芥川龍之介・恒藤恭・藤森成吉らは、皆きびしい検閲をいかにかいくぐり、自己の思いを伝えるかに苦しみ、何かと工夫を凝らし、闘っていたのである。それは近年の研究が明確に示すようになったところだ。

しかしながら、彼らの当時における権力との闘いを、(現実妥協の態度)として、安易に論じる風潮が、これまでは一部の研究者にしばしば見られた。対象人物の置かれた立場や時代という大状況をとかく無視し、研究者としての自己の特権化して論じることから

る弊害である。矢内原忠雄の場合は、専門が植民地論であり、その統治の間違いや腐敗墮落を指摘せざるを得なかっただけに、検閲との闘いは、熾烈を極めた。検閲を無視しては、書物の刊行すらできなかつたからである。伏せ字や発売禁止が大手を振ってまかり通った時代である。重ねて言う。こうした検閲問題を抜きに、矢内原忠雄をはじめとする近代日本の知識人の著作や、その思想を的確に検討することはできない。表現の自由が認められるようになった第二次世界大戦後の感覚で、戦前・戦中の思想家の闘いを安易に斬るのは、論者の研究不足を露呈する以外の何者でもない。このことは、はっきりと言っておきたい。

満洲視察旅行から帰国した矢内原忠雄は、一九三二（昭和七）年度の冬学期、および一九三三（昭和八）年度の夏学期の経済学部特別講義（植民政策講義）で、満洲問題を扱っている。それが翌年刊行された『満洲問題』（岩波書店、一九三四・二）の中核を占める論文となる。京大事件以後いつそう右傾化した社会にあつて、内務省の言論弾圧を十分意識して忠雄は筆を運ぶ。彼の検閲との闘いは、以後、日中戦争・太平洋戦争時代を経て、一九四五（昭和二〇）年八月十五日の敗戦時にまで及ぶのである。

『満洲問題』は、矢内原忠雄の前著『帝国主義下の台湾』（岩波書店、一九二九・一〇）に継ぐ、現地調査に基づく厳密な実証的研究となつた。忠雄は満洲事変に関して調査しようと思ひ立ち、自由な立場で現地調査をしようとした。忠雄の学問の特質が、ここにもはっきりと示されている。それは自己の直感を重視し、現地調査によつて実証を踏まえた論にもつていく方法である。そこに批判的視点が加わる。忠雄は満洲事件を調査しようと、ひも付きでない自由な立

場から現地調査に臨んだのである。その結果、「最初の直感通り満洲事変が日本側の作為であることを私に確信せしめ、爾来私の学問と私の信仰とは一致した力となつて、私をして満洲事変に対立せしめた」（『嘉信』第八巻一、二号、一九四五・一二）と後年回想するような学問的状况を迎えるのであつた。

本書の「序言」で矢内原忠雄は、「今尚ほ継続しつつある満洲事件の性質、内容、及び影響は、科学的研究の対象たるべく余りに新しきものであるが、同時にそれだけ活きたる学問の材料である」と言い、続けて「余がここに諸君に提供せんとするものは資料にあらず、数字にあらず。資料数字は世上に其の文献豊富である。余の提示せんと欲するところはただ一の批判的精神にあるのみ。蓋し批判の欠乏するところ、盲目の危険は最も大であるが故に」とつづる。ジャーナリスト矢内原忠雄の面目躍如といったところか。批判精神の標的は、「真理の敵」にあつたとよい。

『満洲問題』は全十一章と、附録として『改造』『中央公論』、東西の『朝日新聞』などに発表された六つの文章から成る。文献調査と实地調査による満洲問題に対する切り込みは鋭く、説得力に満ちている。例えば「第四章 特殊権益・其の機関」では、南満洲鉄道株式会社・関東庁・関東軍・領事館の四つが「四頭政治」として採り上げられ、詳細に論じられる。「第七章 満洲国の成立」では、満洲国が日本軍の活動により生まれ、現地民の広範な「国民運動の成果ではない」ことを指摘する。また移民・貿易・統制経済などの問題にも批判的観点から鋭く切り込んでゐる。

むろん検閲を意識せざるを得ない箇所があるのは致し方ないことであつた。しかしながら、全十一章は附録の諸文章とも相まって、

満州問題を浮き上がらせる。それは前著『帝国主義下の台湾』同様、決して当時の国の為政者に喜ばれる内容ではなかった。それゆえに休版という処置がとられることとなる。忠雄はその処置を察知してか、『通信』13(一九三四・一)の最終ページに本書の予告を出し、「学問の本でありまして、信仰の書ではありません。但し、買はうと思ふ人は急いで御買取りを御勧めします」と書くこととなる。

第二次世界大戦後編集された『矢内原忠雄全集』(全二十九巻、岩波書店)の第二巻に、本書は収録されている。その「編集後記」の一節には『満洲問題』の休版に言及し、「言論の自由の著しく制限された当時の著作として、その論述および表現に特別の注意が払われていたにもかかわらず、その後時勢はますますきびしさを加え、昭和十三年二月には『帝国主義下の台湾』とともに、いわゆる「当局の内意により自発的休版」の処置を講ずるのやむなきにいたった」とある。

時間と労力とかなりの費用もかけて成した仕事なのに、酬われるどころか、休版処置である。以後、矢内原忠雄はしばしば書物や論文が、国家(内務省)の干渉で発売禁止や全文削除処分を受けることになる。やり切れない思いが彼にはあった。けれども彼は筆を折ることはなかった。書物は刊行された限り、どこかに残るものだ。官憲がいくら躍起になっても、完全に消せるものではない。矢内原忠雄と検閲の問題は、今後詳細に検討されねばならぬ大きな課題としてよい。

前後するが、一九三三(昭和八)年一月二十七日、矢内原忠雄は満四十歳の誕生日を迎えていた。この年の夏、彼は第一回南洋群島

調査旅行を実施する。マリアナ諸島・西カロリン群島・カロリン群島・マーシャル群島・ヤルト島などへの旅である。旅の期間は、七月三日から九月十六日までの二ヶ月半に及ぶ。翌年四十一歳の夏には、第二回南洋群島調査旅行を、六月二十四日から七月三十一日までの一ヶ月余行っている。主としてヤップ島の実態調査であった。忠雄の度重なる長期研究出張は、夫の留守中三人の子を抱えた恵子夫人に重荷となっていた。が、恵子はそれに耐えて、毎回、留守をしっかりと預かった。その母堂堀つるが世を去ったのは、一九三三(昭和八)年十二月一日であったが、夫の忠雄は、その葬儀にも出られなかった。

少し前の十月十六日には、恩師新渡戸稲造のカナダでの客死の通知にも接していた。忠雄にとつて新渡戸稲造は内村鑑三と並ぶ大先生であった。彼は「新渡戸先生を憶ふ」の一文を即座に書き、個人誌『通信』の翌年一月の第13号に載せた。この年はまた、一高・東大の一年先輩で、東大助教授も務めた江原萬里(戦後の「江原萬里全集」では、萬里にばんりとルビを振るが、普及しなかった)が、八月七日に亡くなった。忠雄は取材旅行中のパラオで、家からの便りによつて江原の死を知る。彼は帰りの船の中で筆を執り、「江原萬里君の死を聞きて」を一気に書き上げる。それは江原の個人誌「聖書之真理」終刊号(一九三三・一〇)に載った(のち「江原萬里全集」月報2、一九七〇・三収録)。

この追悼文の終わりに忠雄は、「江原君。黙示録第二章九、一〇節の言葉で以て僕は君を送る。否、反対に君がその言葉を僕に送ってくれてるのかも知れない。可矣、僕も僕の道程を歩き終るであらう。切に願ふ処は最後まで君の様に信仰の善き戦ひを戦ひ、よく忍

びよく望んで、天国再会の幸福を恵まれんことである」と書く。「黙示録第二章九、一〇節」とは、忠雄の用いた一九三〇年版日本聖書協会発行『舊新約聖書』「ヨハネ黙示録」で示すなら、「われ汝の艱難と貧窮とを知る——されど汝は富める者なり。我はまた自らユダヤ人と称へてユダヤ人にあらず、サタンの会に属く者より汝が譏りを受くるを知る。なんぢ受けんとする苦難を懼るな、視よ、悪魔なんぢらを試みんとて、汝らの中の或者を獄に入れんとす。汝ら十日のあひだ患難を受けん、なんぢ死に至るまで忠実なれ、然らば我なんぢに生命の冠冕を與へん」(原文のまま)とある。

ついでに現代の新共同訳『聖書』で右の箇所を示すと、「わたしは、あなたの苦難や貧しさを知っている。だが、本当はあなたは豊かなのだ。自分はユダヤ人であると言う者どもが、あなたを非難していることを、わたしは知っている。実は、彼らはユダヤ人ではなく、サタンの集いに属している者どもである。あなたは、受けようとしている苦難を決して恐れてはいけない。見よ、悪魔が試みるために、あなたがたの何人かを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは、十日の間苦しめられるであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに命の冠を授けよう」となっている。

忠雄は右の聖句を嘯みしめ、邁進するのであった。同年(一九三三)十二月三日、「江原萬里記念キリスト教講演会」が東京駅前丸ビル八階集会所で開かれた。忠雄は「日本的基督教」と題して講演をする。その結びで忠雄は、きびしい時勢を論じて、次のように言う(引用は『通信』12号による)。

今日軍国的空氣の非常時に於きまして、我々の同志の中から

も基督教信仰に立つ真の愛國の故に、打たれ傷つけられた人が既に一人ならず出ました。之が今の時勢であります。ステパノは出ました、之からも出るでせう。深傷であります。併し皆名譽の負傷であります。そして斯く日本國を愛するために傷つけられた其の犠牲が、即ち日本の基督教であります。

矢内原忠雄は、日本の現実に照らして、初代キリスト教の殉教者ステパノの如き人が、同志の中から一人ならず出たし、今後もあることを予見している。

ところで、『矢内原忠雄全集』第二十二巻の巻末に、「南洋群島旅行」と題した大学ノート二冊に、丹念に記録したメモが影印翻刻されている。本巻の「編集後記」には、「著者の死後書斎から探し出された大学ノート二冊をそのままの形で再現したもので、その内容の大部分は一九三三(昭和八)年七月の第一回南洋群島旅行当時の見聞録である。これは後の『南洋群島の研究』のための素材をなしたものと思われ、その点から興味あるばかりでなく、記録の丹念克明さは原住民の家屋・衣服などのスケッチとともに、それだけとしても興味深いものがあると思われ、あえて原形のまま収録したのである」とある。

単行本『南洋群島の研究』が岩波書店から刊行されるのは、一九三五(昭和一〇)年十月のことである。『通信』26(一九三五・九)の消息欄には、「三年四ヶ月かかりましたが、今までの著述の中で一番骨が折れました」とある。フィールド・ワークの成果でもある本書は、今以て問題を投げかける研究となつてゐる。今泉裕美子の「南洋群島研究」が、その意味を説き、再評価している。なお、続

く『帝国主義下の印度』（大同書院、一九三七・三）は、忠雄最後の植民政策研究の成果である。附録に「アイルランド問題の沿革」が収録されている。

経済学を基盤とした植民地研究を続ける一方で、矢内原忠雄は『通信』を舞台に、自身の行ってきた聖書研究の活字化に乗り出す。日曜家庭集会での講義を活字化するという形のもので、後述する『嘉信』と題する個人誌時代に本格化する。また、この頃から彼は各地への伝道旅行に積極的に出かけるようになる。一九三七（昭和一二）年の夏は、恵子夫人の病氣入院など家庭内問題をかかえた中で、鳥取・米子・大山・津山・岡山、それに四国各地・長野県松本などをめぐり、講演をした。

米子では月刊『求道』主宰の藤澤武義に会い、その応援の意味もあって、「国家の理想」と題した講演をする。前年（一九三六）九月号の『中央公論』に寄せた論文と重なるタイトルである。『中央公論』の「国家の理想」に関しては、後述する。藤澤武義は一九〇四（明治三七）年六月十八日、鳥取県米子市の生まれ。県立米子中学校を経て横須賀の海軍機関学校に入学、軍人を目指した。が、江田島の海軍兵学校時代に結核に感染し帰郷。内村鑑三や矢内原忠雄の著作に導かれて信仰に入ったという人物である。大山講演については、篠田一人の「無教会キリスト者の抵抗―藤沢武義を中心として」<sup>6</sup>に詳しい。

右によると、忠雄は大山で二十歳を越すか越さぬかの若者を対象に、詩篇一二〇―一二三四篇を用いて、日本の現実に対するきびしい批判をしたという。

## 二 批判の矢面に立つ

一九三三（昭和八）年一月号の雑誌『理想』に、矢内原忠雄は「日本精神の懐古的と前進的」という論文を発表した。京大事件の起こった年である。この論はのち、単行本『民族と平和』（岩波書店、一九三六・六）に収められたが、一年半後、本書は出版法第十九条により発売禁止処分を受けている。「日本精神の懐古的と前進的」は、四百字詰原稿用紙にして二十八枚、五つの章から成っている。冒頭、忠雄はヨーロッパで勃興する民族主義を問題とし、「民族主義は一面に於ては難関打開の爲めの前進的自覚であり、反面に於ては国際的連関より超脱せんとする懐古孤立反動の思想である」と言い、次に文部省の思想問題研究会が出している数種の冊子の中から、吉田熊次『国民理想の確立』、田中義能『日本文化の特色』、紀平正美『国体の真意義』、安岡正篤『日本の国体』の四つを採り上げ、詳細に吟味し、批判する。

忠雄はそれぞれの論の内容を書き上げたうえ、「以上の四説を通観するに、何れも我民族文化、日本精神の根柢は国家本意であり、国家の中心は天皇であり、而して天皇は或は国民の真自我としての至善、或は実行力の根源としての人格、或は国家の至尊であると為すのである。従つて我日本精神の中心は、天皇に統率せられ天皇に帰一する国家至上主義であると解せられる」と言う。その上で、「現人神」である天皇に統率された日本は「宇宙の道義を実現する絶対的価値をもつ」という神憑りの論を論破する。彼は藤井武の『聖書より見たる日本』などを援用し、「民族的道義」より「宇宙的道義」

の必要を主張した。忠雄は最後に「日本精神運動は単なる反動として、一方には躁狂他方には嘲笑の間に、己が姿を見失つてしまふであらう」と厳しく突き放す。先見性に満ちた警告の論であった。

矢内原忠雄の天皇中心の国家至上主義への警告・反論を集めた文章は、右に挙げた『民族と平和』に集約される。この本には、過去四年間に彼が発表した二十三編の論文が収録されているが、先述のように発禁処分を受ける。以後敗戦に至るまで、彼は検閲との闘いに明け暮れることになる。表現の自由が保障されない時には、沈黙を守ることも抵抗の一典型であろう。が、彼は沈黙せず、毅然としてペンを持って闘った。

どんな困難が襲おうと、彼はペンを投げ捨てなかった。世の雑誌・新聞への発表が困難となると、『通信』を引き継いだ個人誌『嘉信』が主要舞台となる。敗戦までの彼の文筆上の仕事は、『嘉信』あつてのことなのである。他に東京帝大経済学部を退職した後も『帝国大学新聞』は、彼にしばしば発表の機会を与えている。専門とする植民地政策研究が、検閲の強化でままならなくなっても、筆の人矢内原忠雄は、『通信』とその後継誌『嘉信』誌上に、政府批判の文章をしばしば書くようになる。

「日本精神の懐古的と前進的」を収録した『民族と平和』が発禁処分を受けた時、彼は「之これ（筆者注「日本精神の懐古的と前進的」）は是非とも私が一言せねばならぬ問題であると思つて、よく考を練り、腹をきめて書いたものである。問題は基督教と国体との根本的関係である。この論文は『民族と平和』の中に収められたが、右の書物が司法処分に廻されたとき、一番問題にせられたのはこの一文であつた。私自身この論文を最も重んじてゐる」と書く。以後、矢内

原忠雄は国家至上主義の下に侵略戦争を続ける政府の政策を、きびしく批判するようになる。その次第を以下に見ていくことにしよう。

「日本精神の懐古的と前進的」で日本の国家至上主義への警告を発した矢内原忠雄は、『通信』第6号（一九三三・四）に「悲哀の人」という論文を載せた。これは内村鑑三没後三周年記念講演（東京朝日講堂ほか）での要旨を、「悲哀の人」の題下にまとめたものである。

忠雄は神ご自身が悲哀の人であり、イエスがエレミヤが、そして内村鑑三が悲哀の人であつたと言う。内村鑑三は日露戦争当時主戦論の渦巻きの中で、一人非戦論を唱へたことなどをあげ、「先生は衆の見ない真理を見、衆の言はない真理を言ひました。そしてその為に売国と罵られ、迷信と嘲笑されました。悲哀の人の運命は常に斯くの如くであります。併し彼等は真理と共に見、真理と共に語り、而して真理と共に迫害せられたのであります。彼等によりて真理は世に維持せられたのであります」と高らかに宣言する。

次に満洲事変の問題に及ぶ。忠雄は言う。「一昨年九月十八日夜に於ける満鉄線路爆破事件は、日本側ではあれは支那兵がやつたのだといひます。支那側では自分たちがやつたのではないと言ひます。而してリットン調査団は両国の言ひ分を並べて、日本軍の行動は自衛権ではないと断じました。凡ては雲霧の中に包まれて我々には何が何だかわかりません。併し事実は一つしかないはずで、この混沌の中にありて若しほんたうの事実を知つて居る人があれば、その人は悲哀の人たらざるを得ないでせう。『天知る、地知る、人知る、我知る』といふ諺がありますが、事実は遂に欺くべからずであります」と。

忠雄は後年『続余の尊敬する人物』(岩波書店、一九四九・二一)で、『旧約聖書』の預言者イザヤを取り上げ、「預言者はその召命の初端から、悲哀の人たるべく約束せられてをります。それは国民に対する神の愛があまりにも強く、それに対して国民の心があまりに頑固だからです。この二つの事実に挟まれて、神の言を己が国民に告げる預言者は悲哀の人たらざるをえないのです」と書くが、ここに至ってわたしたちは、忠雄自身も「悲哀の人」であったことを悟るのである。

右の講演「悲哀の人」を東京朝日講堂で聴いた桑田秀延は、後年の随想「折り折りの人 矢内原忠雄」(朝日新聞、一九六七・七・一〇)に、次のように記している。

彼の講演は、旧約聖書のエレミヤを引用した話で、預言者とは世の中の人々が黙ってしまつて何も語らないときに、敢えて語る人だと説き、内村がまさにそのような人であったと語り、そして大胆に満州事変に言及し、日本が満州でやっていることがいかなることか、それを欧米の識者がどのように見て批評しているか(ウォルター・リプマンの手になるという有名な論文はその時すでに出ていたであろう)を、植民政策専攻の教授として、国を愛し国のために憂える赤心を吐露して述べたものであった。

それは当時の日本の政情下にあつては、今にも警官が出てひっぱつてゆくのではないかとほらはらさせられるような批判的なもので、真に勇氣にみちた預言者的な発言であつた。

軍国主義の台頭は、昭和が二桁になるに及んで流れを止めることが出来ないほどになる。一九三六(昭和一一)年二月二十六日には、陸軍の皇道派青年将校二十二人が、下士官千五百人を率いて反乱を起し、首相官邸などを襲撃した。いわゆる二・二六事件である。

反乱は無血で鎮定されるが、以後軍部の支配力が一段と強まる。矢内原忠雄はそうした世相の中で、時勢と対峙し、自己の考えを曲げなかつた。むろんこれまでも度々書いてきたが、検閲制度との闘いでは、ストレートな物言いはしにくかつた。彼はことばを慎重に選び、表現に工夫を凝らして、検閲に立ち向かう。それでも右翼思想家や右翼化した内務省や文部省の目をかいくぐるのは、難しかった。

ところで、矢内原忠雄が山梨県南都留郡山中湖村の湖畔に別荘を求めたのは、一九三五(昭和一〇)年の夏のことだ。彼は前々から夏の仕事場として涼しい山に家を持ちたいと願っていた。たまたま一高・東大時代からの先輩で、新居浜の住友時代には一緒だった黒崎幸吉が、山中湖畔に家を建てたので、それに倣つたのである。矢内原伊作の『若き日の日記 われ山に向ひて』<sup>7)</sup>には、「昭和十年以来父は山中湖畔に小さな別荘をもち、夏はそこで仕事をしていた」とある。また、後年黒崎幸吉は、忠雄の葬儀に際して「式辞」<sup>8)</sup>を読み上げるが、中に忠雄の山中湖の別荘にふれた箇所がある。そこには「昭和十年頃私は山中湖畔に私の夏の仕事場として小さい家を建てたのですが、矢内原君も私の隣地に家を求められ、それ以来、毎年夏は山中で過されましたので、一年のうち夏の二ヶ月は、殆んど呼べば応える程の近い距離に住んで居たのでありまして、そんな訳で矢内原君とは死なれるまで非常に親しくしていただいた訳であり



ます」とある。別荘の購入費用は、給与の貯蓄と原稿料収入によつた。以後、忠雄は別荘を神から与えられものとして、研究と伝道に活用することとなる。

山中湖は富士山の東麓にある湖で、いわゆる富士五湖の一つで、面積はもつとも広い。昭和初期から避暑地として、南岸の旭日ヶ丘をはじめ、湖の周辺に別荘地ができてはじめていた。『矢内原忠雄全集』第二十九巻の書簡集を見ると、最初に山中湖畔から出した便りは、一九三六（昭和一一）年七月二十五日付の矢内原恵子宛となっている。また、同年七月三十日付山下陸奥宛便りには、山中湖畔の家を説明し、「吉田から御殿場に抜ける街道は山中湖に沿つて、先づ山中の村を通ります旭ヶ丘（筆者注、旭日ヶ丘）は新開の別荘地で、ホテルや名士の住居のある処です。私共の居るのはその方ではなく、古い山中の村はづれ、広い湖水の水が桂川となつて落ちるたつた一つの出口である梁尻やまじりといふ土地で、北に大出山を背ひ、南が湖水に向つて拓けて居る閑静な場所です。それは静かで、今でも日がな一日うぐひすが鳴いて居ますよ」と書いている。すると別荘の位置は、山中湖北西、桂川の水源の近く、梁尻であったことがわかる。

桂川は相模川の上流部を言い、都留市・大月市など、山梨県の郡内地域を流れ、やがて相模川となる。わたしは郡内地方の旧谷中町（現、都留市）に所在する都留文科大学に長年勤務したので、この辺の地理には比較的詳しい。現在、中央線の大月と富士吉田市を結ぶ富士急行線は、当時富士山麓電気鉄道と呼ばれていた。まだ、中央高速道路などのなかった時代で、山中湖へ行くには、新宿から中央線で大月へ行き、そこから下吉田（現、富士吉田）に出、さらにバス

で山中湖へ向かうのが、一般のコースであった。中央高速道路のなかった時代ゆえ、東京からはかなりの時間を要したが、以後この別荘は、忠雄にとつてなくてはならぬものとなる。彼は別荘を「梁山荘」と称し、研究と伝道に励む。それは第二次世界大戦を経て、戦後、その死に至るまで続く。この地で書いた研究論文や翻訳、それに聖書研究は、枚挙にいとまがないほどである。

さて、二・二六事件があつた年、一九三六（昭和一一）年一月号の『中央公論』に、矢内原忠雄は「真理と戦争」と題する論文を発表し、『民族と平和』（岩波書店、一九三六・六）に収めた。発禁の書籍とはいえ、戦後、新版が出たし、現在は全集にも収録されているので、読むのは容易である。本論文は「一 真理の探究」「二 真理の属性」「三 真理と戦争」「四 戦争の未来」の四章から成る。論文の構成は、がっしりしており、起承転結の論理に破綻はない。本論で矢内原忠雄は、真理とは何かをまず問う。真理とは論者によれば、「証明するを要せざる自明の公理」であり、「真理が存在するや否やは学問の対象たるものではなく、却つて学問の前提たる公理であり、アプリオリである」と言う。

ここには新カント派の哲学の影響を見ることもできる。新カント派は十九世紀末からドイツを中心に栄えた哲学で、矢内原忠雄と一高同期の恒藤恭や藤岡蔵六が、日本への紹介者であつた。この派の哲学の影響を受けた西田幾多郎の『現代に於ける理想主義の哲学』（弘道館、一九一七・五）や『自覚に於ける直観と反省』（岩波書店、一九一七・一〇）などは、芥川龍之介やその友松岡譲らも書簡で話題にしており、忠雄の愛読した書物であつた。忠雄は真理に対する感受性の喪失、無関心の態度を「実に真理研究の最大の敵」とする。次

に彼は真理の属性(特徴・性質)について言う。彼は「秩序と理想」がそれに相当するとする。

本論が高調するのは、〈転〉に相当する「二 真理と戦争」に於てである。彼は検閲を意識し、慎重に筆を運ぶ。それ故、例を日本の軍部には直接向けず、「現今軍国主義が政治権力に対し最も重要な決定的勢力を振へることは、ナチス独逸を始めとして殆んど世界的現象とも言ふを得るであらう」と書くように、一般化・普遍化した方法をとる。その上で「軍国主義の下に於て保護せらるる学問は自然科学、殊に軍事に直接的応用ある学問であり、社会科学の領域に於ては国家主義国粹主義及戦争是認讚美の思想である。若しも戦争が真理の属性に適ひ、人類進歩の原動力であるものならば、軍国主義は即ち真理探究の保護者であらう」という、反語めいた屈折した表現をとる。彼は戦争を真理の名において是認することを拒否する。彼は言う。「戦争そのものは秩序の破壊であり生命の喪失である。それが秩序と生命とを属性とする真理に遠きものたることは明かである」と。そして「真理の道は戦争になくして平和にある。蓋し平和は秩序であり生命であり、真理の属性は其の中に完全に発揚せられるが故に」とし、イギリスの名士の戦争観を紹介する。

結びの「戦争の将来」では、戦争は「歴史的現実」ながら、その事が「戦争を是認し、戦争を擁護する理由とはならない」とする。「戦争は害悪である。反真理である。凡そ真理の属性は秩序を愛して混沌を嫌ひ、生命を愛して殺戮を憎む。真理は平和を愛し、戦争を嫌ふのである。従つて戦争を挑発する如き制度及思想に対抗することは真理探究者の自明の任務と言はねばならない」という彼の見解は、真つ当である。さらに「日本の教育界宗教界は平和の為に

何かを言つたか」と問い、「真理の探究、何ぞその名の高遠にしてその道程の峻険なる。併し何人か之がために精進し、真理の燈火を暴風の中に守護せねばならない。現代日本はかかる真理の探究者を要求する」と、忠雄らしい格調高いことばで結ばれる。

本論が発表されると、すぐ例の蓑田胸喜が反応する。『原理日本』の一九三六(昭和一一)年二月号に載つた「矢内原忠雄氏の『真理と戦争』批判」である。蓑田は同誌一月号では、「矢内原忠雄氏の神話思想と時事批判との不実無根」と題した矢内原批判も書いていた。蓑田はこの年九月号の『中央公論』に載つた忠雄の「国家の理想」にかみついた文章などを含めて、三井甲之との共著の『真理と戦争・東京帝大教授矢内原忠雄氏の『真理と戦争』の批判に因みて』(原理日本社、一九三七・一一)を刊行する。いま、その本を手にとって確認すると、本と云つても一〇四ページほどの片々たる安直な造りの小冊子である。大部分を蓑田胸喜が書き、巻末に三井甲之が「文教当局の看過すべからざる事実」東京帝大矢内原教授の国体破壊思想意志の学術的批判」を書いている。

三井甲之(本名甲之助)は、一八八三(明治一六)年十月十六日、山梨県中巨摩郡松島村(現、甲斐市)の生まれ。東京帝国大学文科大学出身の歌人であり、評論家でもあった。彼は若き日、正岡子規の短歌革新に賛同し、伊藤左千夫の指導を受けるといふ経歴を持つていた。その万葉調の歌には、見るべきものもある。「友に」と題した短冊のうた「海の波よせてはかへすと思ふよりもよせてはかへすうねりと見たまへ」(山梨県立文学館蔵)など、その代表である。

けれども、一九二五(大正一四)年に右翼団体日本原理社を結成、『原理日本』を創刊した頃から右傾化し、激動の昭和期には思想的

に極端に反動的となり、デマゴグに成り果てていた。その内容のデマゴギーぶりとも文章の空疎さを知るには、右の本の巻末に寄せた文章の、冒頭十数行を引用するだけで十分である。左に示そう。

矢内原忠雄氏は『民族主義の復興』といふ論文に次の如く述べて居る。

『ロシア革命による新時代の自由解放思想は各国の進歩的思想家の共鳴を呼び起こした。(矢内原氏著『民族と平和』七ページ)

ロシア革命に対しては故吉野作造氏、牧野英一氏、スエヒロ厳太郎氏等を始めとして東京帝大法経済学部教授が挙つて共鳴的態度を示しロシア革命を『二十世紀の事始』(牧野氏)と讚美し、ロシア革命憲法第三條の土地無償没収の日本農村への適用を奨導する(スエヒロ氏)に至つたのであるが、彼等は進歩的思想家でもなく、又ロシア革命のマルクス・レニン思想は新時代の自由解放思想でもなく、それらは時代遅れの誤謬思想危険意志の迷信盲動であつたことは当時からわれら同志の文献引用誤謬指摘の学術的批判に基づく当局への警告となり、帝大同僚教授中敢然此の赤化教授の妄説を批判するもの殆んど一人も無く、遂にも蓑田胸喜氏のスエヒロ氏告発となり、ミノベ達吉氏への学術的批判終結の宣言となり、その対策は遂に政治的に転向して所謂機関説問題として国体明徴問題に開展したことによつて世間に周知せられて居るところである。それにも拘らず矢内原氏は昭和十一年初刷の上記著書に此の如き言を弄し、東京帝大内部の赤化持続を実證しつゝあるのである。

またロシア革命指導思想としてのマルクス共産主義とそれに加勢する容共意志者(矢内原氏をその中に見出す東京帝大教授の多数の如き)に対する対外的膺懲が現下支那事変の戦争目的であることは政府によつて宣言せられ、また国民一般によつて了解せられて居るに拘らず、容共抗日意志に対する対内的膺懲は行はれざる跛行政治に乘託して矢内原氏は帝大教授として公然此の共産主義革命と容共意志とを『新時代の自由解放』思想であり、それに共鳴する容共意志者を『進歩的思想家』であると強弁しつゝあるのである。これは由々しき事態である。

今となつては、まさに読むに耐えないアナクロニズムの駄文である。一文の非常に長い、読みにくい文章だ。思わせぶりの△△△印や、△△△の傍点が目立つ。

蓑田胸喜の本書の「序文」もまた、振るつて居る。それはただ矢内原忠雄を追い落とそうとする悪意に満ちたものであつた。冒頭のフレーズ六行を写すと、「東京帝大教授矢内原忠雄氏は自著『民族と平和』の『真理と戦争』と題する論文中に、『戦争は害悪であり、反真理である』といつてゐる。この徹底反戦主義の批判は本文に譲るが、戦争は反真理であるといふ如き語法思想は、現代に於いて認識論、学術論理学の全く初歩的知識もない科学的非常識、致命的無哲学の不随意表白であつて、科学や真理を論ずる資格を欠いたものである。いふまでもなく単に真理といへば、そのうちには精神科学哲学的真理の外に、数学的真理もあれば自然科学的真理もあるから、戦争は反真理であるといふ如き粗雑空想思想は、それこそ反真理である」——ここに蓑田胸喜の作戦があつた。

まず、ねらいを定めて、定めた対象をこき下ろす。そして雑誌『原理日本』に書き、次に百ページほどの簡便な書物に仕立て上げる。名の知られた三井甲之と共著の形をとって箔をつけ、政治家(主として貴族院議員)や文部官僚や内務省警保局に送る。ことさらに事を大きく見せようとしたのである。時代の嵐の中で、論理を無視した蓑田胸喜の駄文に等しい狂信的文章が、一部に共感を呼んだのも事実である。

本章冒頭に挙げた竹内洋『大学という病 東大紛擾と教授群像』は、このような蓑田胸喜の暗躍を「悪魔的情熱としかいいようがない」と言い、「こういうこともできる。急速な近代化にともなう欧化と国粹との葛藤による自家中毒は近代日本の宿痼だったが、そうした病が蓑田の身体にのりうつったのである、と。こう解釈すれば蓑田の跳梁跋扈は蓑田個人の病でも蓑田個人の狂気でもないことになる。蓑田的なるものは近代化(する)日本のバックラッシュだったのである。蓑田胸喜が跳梁跋扈しなくとも、蓑田的なるものは、ほかの誰かの身体を乗りものにして表出、爆発したはずである」とまとめる。

わたしは竹内のこのまとめ方には、賛同できない。一読もつともらしいが、大局的観点からの歴史認識を欠く記述だからだ。竹内はまた、後述する矢内原忠雄の東京帝国大学経済学部教授の辞任(矢内原事件)を、大学内の派閥抗争の犠牲という立場の強調で、終始解釈するが、それにも承服できない。ちなみに、竹内の中公文庫版『大学という病 東大紛擾と教授群像』は、巻頭に「主要登場人物」として、それぞれの派閥に教授連をグループ化し、土方派とか河合派五人組とかに分類、その上に顔写真まで添えている。これは明ら

かに売らんかな主義の読者に媚びた、興味本位のやり方である。

忠雄の東大教授辞任には、いくつかのことが重なったとはいいえ、時代の嵐、——これまで縷々述べてきたような、世界共通のファッションが介在したことが、第一の要因であった。贅言するならば、第一次世界大戦後、イタリヤ・ドイツ・スペイン、それに南米諸国・東欧諸国に出現した全体主義的・国家主義的独裁という歴史的事象は、日本でも猛威を振り、京大事件を、美濃部達吉の「天皇機関説」事件を、そして、当面の課題である矢内原事件を生んだと考えるのが自然である。それが歴史にかなった見方であるとしたい。

矢内原事件を東大経済学部内の派閥次元に重きを置いて裁く論者は、竹内洋一人にとどまらない。美作太郎『戦前・戦中を歩む 編集者として』(日本評論社、一九八五・一一)における事件の回想(29東大経済学部の内紛)にしても、竹内論に大きく頼る先の将基面貴巳の『言論抑圧 矢内原事件の構図』における事件のまとめ方(同書「第三章 東京帝国大学経済学部をめぐる抗争」)にしても然りである。この本に至っては、「派閥抗争がどのように矢内原を辞職に追い込むに至ったのかを、詳しく検討してみたい」(同書序章)として、事件を「派閥」次元にウエイトを置いて論じる。そして矢内原忠雄の「愛国」に対し、蓑田胸喜の跳梁も「愛国」の一つの姿であったとするのである(同書終章)。本書の致命的欠陥は、「蓑田にとつて、自分の言論活動は、矢内原に限らず、すべての「毎日的」言論人による攻撃から「日本」を防衛する行為だったに違いない。蓑田の主著が『国防哲学』と題されている点は、その意味で示唆的である」(同書第二章九七ページ)などもっともらしく説明し、結果的には当時の蓑田胸喜を肯定し、評価するような言い方をするとところにある。

文献調査は徹底しているものの、論者の歴史観・歴史認識は極めて脆弱である。そのためか蓑田や、この後ふれる土方成美を、歴史に照らしてはつきり否定できないのである。それゆえ彼らの主張も一つの「愛国論」、「あるがままの日本に対する愛国」(同書終章、一九八ページ)であったなどという、実に奇妙な論理を振り回すことになってしまふ。それは歴史的文脈に立った解釈を否定するもので、矢内原忠雄のもつとも嫌った「真理の敵」をのさばり返らせる理論だ。

中公新書の将基面貴巳の本が刊行された時、「朝日新聞」をはじめとする日刊各紙は、こぞつて絶賛したのだが、皆、右に指摘した点を見逃していた。管見に入ったところでは、唯一異議を呈していたのは、忠雄の郷里、愛媛県今治市の「矢内原忠雄顕彰」実行委員会（たか）が発行(二〇一五・三・二五)した講演会記録に載った西永頼たかの「矢内原忠雄の生涯をきめたもの」である。そこで西永は、「蓑田の愛国は、天皇を元首とする国、すなわち当時の国体を擁護しようとする愛国であった」として、将基面貴巳の未熟な見解を、はっきりと否定する。歴史認識をめぐって、再び危機を迎えているこんにち、こうした未熟で危険な論に対しては、当然のことながら敏感に反応し、その誤りをはつきり否定する視点が必要であることを、強調しておこう。

矢内原忠雄は、もともと学内派閥にかかわるような人ではない。彼は派閥抗争には無縁の人であった。竹内洋にはある程度それは判っていたようである。が、当時の東京帝国大学経済学部には、「河合派」と「土方派」の派閥対立があったとしたうえで、忠雄を「大内派」ならぬ「少数派」という、何が何だかわからぬ名称のくくり

方をしている。たとえ派閥抗争があったとしても、それが矢内原事件の主因ではなかったことを、わたしは、ここでははっきりと言いつておこう。それが歴史を見る眼であると固く信じるからである。

『中央公論』一九三八(昭和一三年一月号)に、菅野司郎という人(経歴は定かでない。恐らく仮名であろう)が、「大学騒動楽屋話」という記事を書いている。これは事情に通じた人が書いたとすぐに分かる内容だ。矢内原事件を「かゝる羽目にいたるまでには東大経済学部教授間に複雑な事情が介在してゐるのである」として、それを学内派閥に求め、「今度の如き矢内原事件の原因ともなつてゐる」と書くが、竹内論にどこか重なる。竹内論は菅野司郎の「楽屋話」に、かなり頼っている。竹内論ばかりではない。右の美作太郎や将基面貴巳のものも、そして他の多くの矢内原事件に関する論もそうなのである。『中央公論』同号一五四ページ以降には、土方成美の「時局と大学」という論文が載り、菅野司郎の「大学騒動楽屋話」は、土方論文の脚部に相当する箇所(ページの下三分の一)に配置されている。事情通の打明け話の感があるものの、書き手の歴史認識は希薄である。小状況としての「楽屋話」としては、おもしろいものの、事件をめぐる大状況としての時代把握・歴史認識を欠くのである。

竹内洋の『大学という病 東大紛擾と教授群像』の特質と限界も、ここにあることだけは、しっかり指摘しておこう。資料によく当たった折角の労作が、歴史認識を欠くと、単なる興味本位の週刊誌の記事と化す典型的例である。今一度、はっきりと書く。これから述べる矢内原事件は、世界的な激動の時代が生んだ悲劇であつて、

東京帝国大学経済学部内の単なる派閥抗争という低次元の問題で終わるものではないと。確かに大学という組織には、派閥がはびこる。しかし、そんなことで一教授を追放できるものではない。当時にあっても大学の自治は、それなりに存在したのである。しかも、矢内原忠雄ほど世に言う派閥と縁のない人間は稀だ。彼は神戸一中時代から友人は多くいた方だが、利益中心に結びつく派閥を作るなどという行動はとっていない。それはこれまでの本論(一―八章)が実証しているところだ。

時代の嵐は、日中戦争の開始とともに、とめどもないものとなっていた。矢内原忠雄は、日本の軍国主義化に反対し、平和主義の旗を掲げて、時代の嵐に立ち向かい、一人で闘った。二・二六事件に際しては、一人超然として立っていた。「無然として私は立ち上つて理髪店に趣き、戒厳司令部発表のラヂオ報道を耳にしつつ、口髭を剃り落した。独逸留学の時から十五年間私の鼻下を飾つたものであつた。昔の預言者が衣を裂き、麻を着、灰をかうむつたのに比すべくもないが、時局に対する憤激と悲哀のしるしを身に帯びたのである」<sup>9)</sup>という正義と平和のための闘いに、一人立つ。そのバックボーンは、むろん内村鑑三から学んだ、キリスト教の信仰に立つ平和主義にあつた。

一九三七(昭和一二)年九月号の『中央公論』に、彼は「国家の理想」という論文を発表した。蘆溝橋事件が起こり、国中が大騒ぎの中で発表したものである。忠雄は検閲を十分意識して書いた。けれどもそれは、「安寧秩序ヲ紊乱スル」という理由で、一部削除処分を受け、その上に伏せ字の多い論となった。すでに何度かふれたが、検閲という障壁を抜きに、当時の学者や文芸者、そしてジャー

ナリストの文章を論じることとはできない。また言論の自由が保障されるようになった現代の感覚で、当時の論考を断罪するほど空しいものはない。本論の結びに彼は、「無批判は知識の欠乏より来るのみでない。それは理想の欠乏、正義に対する感覚の喪失より来る。直観の貧困、啓示の枯渇より来る。ここに於てか国家非常時に対する哲学・宗教の任務の特に重要なを知るのである」と書いた。彼の信条のにじみ出た実に真つ当な見解である。後年、忠雄は大塚久雄を聞き手とした『私の歩んできた道』<sup>10)</sup>で、論文「国家の理想」について次のように言っている。

矢内原 昭和十二年の夏休みに入った頃ですが、中央公論から私に論文を書いてくれ、テーマは何でもいいと言ってきたんです。それで「国家の理想」というのを書いた。六月頃書いて九月号に載つたのです。ちょうど蘆溝橋事件の起つた直後それに刺激されて一気呵成に書いた。それが、九月号の『中央公論』といつても、八月にはもう発売になつたが、すぐ発禁になつてしまつた。表ざたになつたのはそれからですね。それまでは私の言論や論文、講義をおもしろくないと思つていたので、直接私にはかかつてこなかった。

大塚 その論文で一番当局の忌諱に触れたのはどの点だったのでしょうか。

矢内原 国家の理想は正義と平和にあるということ、戦争という方法によって弱者をしいたげることではないということ、国内においても国際的にも強者が弱者をしいたげるために用いる手段が暴力で、それが戦争政策になる。国家の理想とい

うか、いかなる国が立派になり、栄えるかということ、理想にしたがって歩むかどうかということだ。理想にしたがって歩まない国は栄えない。一時栄えるように見えても滅びるものだという議論が問題となった。

特に戦争は国家の理想に反するところでしょう。もちろん、私は気をつけて書きましたから、日本の現状を直接に指摘したような言葉はないのです。理想論として書いておる。最後に旧約聖書のイザヤの預言を引いて解説をした。ですから、読む人によっては、あまり抽象論に過ぎるじゃないかという批評もあつたくらいです。

矢内原忠雄追放の「火付け役」蓑田胸喜は、前述のように『真理と戦争・東京帝大教授矢内原忠雄氏の「真理と戦争」の批判に因みて』と題する一書をまとめて矢内原忠雄攻撃に乗り出していった。彼は忠雄の「宗教と科学と政治」(『中央公論』一九三五・三)をも、「国体破壊思想と徹底非戦論」だとして論難する。「クリスト教とユダヤ教とを無批判に結合しマルクス主義にも媚態を示す」とか、「非戦論・無抵抗主義とニセ・クリスチャンの無反省驕慢思想」などという見出しでの居丈高で、幼稚な矢内原忠雄攻撃であつた。

蓑田には内村鑑三門下で、聖書研究に徹した本格的キリスト者矢内原忠雄が、まったく理解できていなかった。とまれ蓑田胸喜は、一冊の書物まで出して、矢内原忠雄を攻撃したのである。こうした外濠攻撃の末に來たのが、職場である東京帝大経済学部内での矢内原忠雄批判という直接攻撃、内濠の埋め立てであつた。引き金となつたのが、右の論文「国家の理想」である。彼は批判の矢面に立

たされたことになる。

「国家の理想」は、矢内原忠雄を大学辞任に追い込む、いわゆる筆禍事件の引き金となつた論文である。発表誌の『中央公論』には、多くの伏せ字箇所がある。『矢内原忠雄全集』第十八巻に収録された本論末尾の「編集者注」には、「本論文が『中央公論』に発表されたときには、多くの伏字があつたが——本文8ポイント組の箇所がその部分である——、後『日本の傷を医す者』に収められたさい、著者自身の手によつてこれらの伏字は埋められた。本文はこれを底本としたが、外に著者私家蔵本の『中央公論』には、ペン書を以て伏字が埋められてあり、本文とは若干の相違があるので、その相違の箇所に「」を以て囲んだ数字を付し、私家蔵本の該当語句を以下に掲げた。傍線の箇所である」とある。

ここで矢内原忠雄は、「国家の理想」というものは、正義と平和にあり、拳国一致の戦争にあるのではないと言う。理想とは、欲望のままに生きる動物とは異なり、人間を人間たらしめるもので、国家もまた理想を求めなければならぬと彼は主張する。また、彼は少数者の声にも耳を傾けよと呼びかけ、『旧約聖書』の預言者イザヤを例にとつて説明する。「正義と平和とが、イザヤの啓示せられる国家の理想であつた」とするところには、イザヤに自身が重ねられていくかのようだ。

忠雄はこの論文を、次のような文章で結ぶ。

現実に没頭し、現実に引きずられて行く限り、事情に通ぜざる国民は到底現実政策の批判者たるを得ないが、一たび国家の理想に自己の立場を置く時、その正邪の判断は国民中最も平凡

なる者にも可能である。無批判は知識の欠乏より来るのみでない。それは理想の欠乏、正義に対する感覚の喪失より来る。直観の貧困、啓示の枯渇より来る。ここに於てか国家非常時に對する哲学・宗教の任務の特に重要なを知るのである。

矢内原忠雄は、ここで理想を持つことと、批判力の大切さを言う。が、本論を載せた『中央公論』一九三七(昭和一二)年九月号は、一部削除や伏せ字問題に終わらず、発行と同時に発売禁止になつてしまう。以後、矢内原忠雄は官憲による要注意人物として当局の監視下に置かれ、敗戦時に至る。この論文は、忠雄の所属する東京大学経済学部でも取り上げられ、問題視されることになる。

### 三 東大教授の辞任

当時の東京帝国大学経済学部の学部長は、土方成美<sup>ひじかたはらび</sup>であった。彼は一八九〇(明治三三)年七月十日生まれで、旧姓町田成美、矢内原忠雄の三歳年上である。岡山の第六高等学校を経て、東京帝国大学法科大学経済学科を主席で卒業、大学に残った。専門は理論経済学である。のち東大教授土方寧<sup>やすし</sup>の女婿となり、土方姓を継ぎ、政略結婚などと噂された。彼は国家主義的考への持ち主で、元より矢内原忠雄のキリスト教信仰に立った国家観や植民政策論を理解できる学者ではなかった。短絡的に物事を判断するところがあり、学内政治には熱心であった。先にも記したところだが、矢内原忠雄と大内兵衛と土方成美に、関東軍特務部から電報で満州国経営の助言依

頼の招聘状が届いた時、矢内原と大内は断つたが、一人出張中の台湾から駆けつけ、人頭税などという珍説を主張したという人物である。

土方はこの年(一九三七)年十一月三日の明治節(明治天皇の誕生日)には、教授の本位<sup>ほんゐ</sup>田祥男<sup>たけしお</sup>や助教授橋爪明夫<sup>はしづまあきと</sup>らと学生を引率し、明治神宮へ参拝するという時局迎合の態度を示していた。彼が矢内原忠雄の「国家の理想」を、教授会で問題ありとして取り上げたのは、同月、十一月二十四日の教授会であった。忠雄が当時書いた「大学卒業から大学辞職まで」<sup>①</sup>という文章がある。そこにはこの日付がしっかりと書き留められている。大学辞職に関する本人自身の当時の記録なので、信頼できる日付である。以下に該当箇所を掲げる。

私は公に戦つたつもりです。併し彼等は密かに企<sup>たくら</sup>みました。今年九月号の『中央公論』誌に掲載せられた私の論文「国家の理想」は其筋から発禁処分になつたのみならず八月の臨時議会で某右翼代議士の質問により政治問題化されようとなりました。併し其時は表面無事に済み、私は十月からの新学期でまた例年の通り植民政策の講義を始めて居たのであります。然る処帝大教授の悪罵を事とする札付きの某という男が、その主宰する新聞、雑誌、単行本等で、前記論文を中心として執拗に私の攻撃を始めました。私は何の気にも留めないで居ました。処が十一月二十四日の経済学部教授会で、全く突然に「矢内原教授の『国家の理想』といふ論文は甚だ不穏当であつて、外部から問題とせられた時教授会としては擁護出来ないものと思うが如何」との議題が学部長から提出されました。しかも過半数の教



授はこの提案に賛成する形成が察知せられましたので、私は直に辞意を決しました。併し事は私一己だけの問題でなく、大学としての公の立場から骨を折つてくれる同僚達もあり、また総長も心配してくれましたので、私は暫く静観の態度を取つて居ました。併し学内外の動きが激しく、事態が紛糾を重ねる様子なので、遂に十二月一日午前総長に辞表を呈出し、同日午後の教授会で私の所信を披瀝して同僚諸氏に決別した後、新聞社を通して左のステートメントを発表しました。

自分は本来日本国を衷心熱愛する者であるが、発表の言論に關し問題を惹起したことを遺憾に思ふ。自分として此上在職するのは大学に対し迷惑をかける所以なる事を知つたので、本日総長に辞表を呈出した。

確認の意味で今一度言うが、右は辞職直後に書いて、個人誌『通信』に載せたものである。忠雄の問題とされた論文は、『中央公論』の「国家の理想」と著書『民族と平和』、である。要は戦時において平和を述べたのがよくないというのであつた。忠雄は右の一文の続きで言う。「理想の大学」は私を必要としても、「現実の大学」には私の存在が却つて邪魔となるのが解つたので、自分から御暇を願出た次第であります」と、『私の歩んできた道』（東京大学出版会、一九五八・三）には、この文章のほか、他に『帝国大学新聞』（十二月六日付）に寄せた「矢内原教授別れの言葉」に加筆した「終講の辞」、それに「学生からの手紙」二通を添える。

大内兵衛はこの年十二月六日発行の『帝国大学新聞』に「矢内原

君に別れる<sup>12)</sup>」という一文を書いている。辞任のいきさつなどには、一切触れていない。当局の検閲を慮つてのことである。時代の圧力や趨勢が、なぜ辞任なのかを語らせなかつたのである。後年大内兵衛は、この一文を自著『高い山―人物アルバム』（岩波書店、一九六三・一〇）に収録するに際し、はじめに序文を添えて、「昭和十二年十二月一日は矢内原君が大学を追われた日であつた。それに対しては友人も学生も公然と別れを惜しむことができなかつた。肅然として声をひそめて、この愛国者を目送するしかなかつた。これは、そのとき、『大学新聞』にわたくしが書いた送別のことばである。彼がなぜ大学をやめなければならなかつたについての説明が一言もないのは、それをするのが許されなかつたからである」と書いている。

「矢内原君に別れる」の内容は、友情に満ちた、心のこもつた送別のことばであつた。結びの文章は、「ぼくの一軒置いて隣が空家となるのである。このさみしさを僕はどうしたらいい。窓外を望めば葉の落ちた銀杏のたくましい並木がある。ああその一本が倒れたような空虚である」とあつて、読者の心を打つ。

なお、大内兵衛には当時を回想した「矢内原教授辞任のいきさつ<sup>13)</sup>」という詳細な記録文もある。これはものが自由に言えるようになった第二次世界大戦後に、一九三七年当時のメモをもとに記した矢内原忠雄追放劇の詳細を語つたものだ。その骨子を紹介するなら、十一月三日（明治節）に経済学部長の土方成美は本位田祥男教授や橋爪明男助教授などと学生数百名を連れて明治神宮へ参拝する。大学行事としては、当時にあつても異常である。そうした中で十一月二十四日に、「日本の大学の歴史にとって恐らくは類例のな

いほどに重要なものであった」とされる東大経済学部の教授会が開かれる。大内によると土方学部長は紫の風呂敷から突如『中央公論』九月号を取り出し、教授会メンバーの意見を問うと言った。

突如問題を切り出し、魔女裁判よろしく、ある人物を糾弾するというのは、ファシストのやる手である。すぐ部長の意を汲んだ連中が勇ましく同調する。彼らはあらかじめ話し合い、矢内原忠雄糾弾の教授会の段取りを決めていたかのようである。背景には重ねて言うが、大状況としての右翼化する世の動きがある。そうした中では何でも罪に貶めることができるのである。忠雄はまったく準備ができていなかったもので、多少まごついたであろう。当日の教授会は、『中央公論』九月号の論文を読んでいない連中も多く、問題は次の教授会に持ち越された。

矢内原問題は荻田胸喜らの暗躍もあって、文部省や内務省でも問題視する。危機を察した大内兵衛や舞出長五郎が長与又郎総長と面談し、事態をこじらせず、矢内原を護るよう進言する。が、『通信』十月号(47号)に出た忠雄の、藤井武追悼講演速記「神の国」での末尾の一文、「日本の理想を生かす為に、一先づこの国を葬つて下さい」(引用は、初出『通信』による)の一文が問題とされ、総長もさじを投げたという。この講演は、東京日比谷の市政講堂で行われ、忠雄は藤井武の詩『羔の婚姻』を紹介しつつ、理想を失った日本の現状を嘆いたものであった。

近年、長与又郎の記した日記(小高健編『長与又郎日記』学会出版センター、(上)二〇〇一・三、(下)二〇〇二・六)が刊行されたことで、総長の長与の立場も知られることになる。日記は、長与が矢内原問題を平穩に解決しようと努力していたことを語る。そして最終的には、右

の『通信』の一文を知って断念した経緯が述べられている。後年、矢内原忠雄は長与総長を評して、「善人ではあるが、いささか勇氣に乏しい人」と、「戦の跡」(『嘉信』一九四五・一二)に書いている。そういう面が長与又郎という人物には確かにあって、忠雄を最後まで護りきれなかったのである。

十二月一日の教授会で忠雄が辞任理由を述べ終わった時、長老の森莊三郎教授が、矢内原教授に謝意を表したいと申し出たのを本位田教授が制した、と大内は右の「矢内原教授辞任のいきさつ」に記している。これが京大事件と並び、日本の大学史上落とすことできない矢内原事件の輪郭である。

それにしても当時の学部長土方成美なる人物は、矢内原忠雄にとつて不可解な、やりきれない人物であった。いくつかの証言があるが、土方は教授会を魔女裁判にするために、「紫の風呂敷」についで雑誌『中央公論』を教授会に持ち込み、おもむろに開けた(大内兵衛・美濃部亮吉・有沢広巳・脇村義太郎らの証言がある)。こうしたところからして、演技じみている。そして、あらかじめ気脈を通じていた教授会メンバー(本位田祥男・田辺忠男ら)に発言させ、忠雄を追いつめた。なお、「紫の風呂敷」(紫のふくさ)と書いた証言もある)について土方は、後年の回想記「事件は遠くなりにけり」(『経済往来』一九六五・三)で、「全く噴飯に値する」として、「私は、むらさきのふくさなどもつてはいない」と強く否定している。

立花隆は矢内原忠雄が最終講義(『帝国大学新聞』一九三七・二一・六掲載)の最後に、「私は身体を滅して魂を滅すことのできない者を懼れない。私は誰をも恐れもしなければ、憎みも恨みもしない。ただし身体ばかり太つて魂の瘦せた人間を軽蔑する。諸君はその様な

人間にならないように……」と語ったことを採り上げ、これは忠雄の土方成美に対する皮肉だとする。その見方には、土方の右の『事件は遠くなりにけり』の「矢内原氏は学生に対する告別の講義で『豚の如く肥って、魂のやせた人間を軽蔑する』とか、『行列の先頭に立って歩くことを好まぬ』とか、さんざん私に対する皮肉をいつて東大を去って行かれた。魂の肥った人のいい分はちがったものである」の言説を採りあげる。その上で立花は、後年大河内一男が、東大総長として卒業式に臨んで行った式辞における「太った豚になるより、瘦せたソクラテスになれ」の名演説は、両者のやりとりを背景にしているのを説得力豊かに指摘する。

土方成美は、のち平賀肅学で東大を辞める。長与総長の後を継いだ平賀謙は、経済学部紛争の元凶と見なされた土方成美と河合榮治郎の二人を休職処分としたからである。ちなみに「肅学」とは、忠雄の一高基督教青年会時代の仲間長崎太郎が、京大学生課長時代の一九三七（昭和一二）年六月に、理学部内の会計不正事件に学部長の松山基範教授と浜田耕作総長が「英断」を以て当たったことに対し、はじめて用いた造語であった。<sup>15</sup>それがジャーナリズムで採りあげられ、一般化したのである。あまり知られていないことなので特記しておきたい。

平賀肅学では、総長となった平賀謙が一九三九（昭和一四）年一月、経済学部の紛糾の責任を問うかたちで、河合榮治郎を「学説表現の欠格」で、土方成美を「綱紀の紊乱」などの理由で、学部教授会にはからず休職処分にした。それを不服とし、土方・河合の二人は辞表を提出、土方に同調する者九名、河合に同調する者四名も従うという事態に発展する。経済学部は助教以下辞表撤回と補充

人事で辛くも存在することとなる。なお、河合榮治郎は、経済学部の教授時代から日本の国家主義を批判し続け、一方で青年教育に力を尽くした。そして『学生と教養』（日本評論社、一九三六・一二）にはじまる〈学生叢書〉の編集と執筆に打ち込むが、敗戦を見ずに病死した。土方成美は戦争を生き延び、戦後、中央大学や獨協大学の教授を務めている。土方の下で勢力を振るった本位田祥男は、平賀肅学に抗議して東大をやめ、大政翼賛会の経済政策部長などを務め、そのためか戦後公職追放を受けている。のち、立正大学や明治大学教授を歴任した。

忠雄は本位田に関しては何も書いていない。本位田祥男のことは、本論「第四章 生と死」の「三 一高卒業前後」で採りあげているが、忠雄の一高・東大の一年先輩に当たった。若き日の本位田は秀才の勉強家で、忠雄も一目置いていた。彼はマックス・ウェーバーの日本への紹介者として知られ、将来を期待された人物であった。が、四十年代半ばの本位田祥男には、かつて後輩の学友に好印象をとどめた姿はなく、権力者に追従する役割を担っていた。彼もまた時代に翻弄された人物だったのである。本位田に比べると、土方成美はより政治的で、人が悪い。すでに述べたが、忠雄は土方に対しては時々、そのダメぶりを揶揄している。それは直感に支えられた印象ながら、核心を衝く。

『東京朝日新聞』は十二月三日付夕刊の紙面に、「最後の授業に落つ涙／切々の言・学生も暫しの拍手／去り行く矢内原教授」の三行見出し、写真入りで報じた。妥当な記事と判断できるので左に引用する。

銀杏並樹にお別れの日——辞表を提出した東大矢内原教授の終講の辞」は二日午前十時から法経七番教室で行はれた、前日から伝へ聞いた経済学部の学生はもとより法、文それに先輩も入り交つて、七番教室は満員、青白い緊張と興奮が漲る中を同教授は前屈みの姿勢で平静な語気で約一時間植民政政策の残余の講義を済ました後

大学の使命を私は批判的精神に在りと信ずる、大学は一段と高い所に在つて、生起する様々な社会現象を分析し、批判し、真に国家的立場からは是を是とし、否を否とする事だと思ふ。在職十七年無骨な自分は芝居も見ずゴルフも興なく研究室を唯一の本拠とし、この信念を以て進んで来たが、これ以上大学に御迷惑をおかけするのも如何かと思ひ辞表を提出した、今こゝに顧みて私は諸君に対し必ずしも親切な校友であり得なかつた事を謝したい。諺に「肉体は滅びるも精神を殺す勿れ」といふ、私のこの一言を諸君にお贈りしたいと思ふ……

と結ばば学生は拍手を以て送り、涙ぐましい情景であつた。先輩であり、法学部教授となつていた南原繁は、「Y君の辞職きまりし朝はあけて葬りのごとく集ひゐたりき」(歌集「形相」とうたに詠んだ。かくて矢内原忠雄は東大教授の職を投げ打った。否、追われたのである。

『帝国大学新聞』一九三七(昭和一二)年十二月六日号は、「矢内原忠雄教授／自発的に辞職す／経済学部情勢急激に変化」の見出しで事件を報じたが、内実は、きびしい周囲の情勢に耐えられなかつ

たのである。当時の忠雄をめぐる状況を、後年友人の三谷隆信が「座談会わが友 わが父」で語っている。三谷は「これはいまだから言つてもいいんだらうけれど」と前置きし、以下のように発言する。

実は大内兵衛君やなんかも引っぱられたね。そして矢内原も少しあぶないということが新聞に出てまして、私、自由が丘の自宅へ行つたんですよ。聞いてみたら、だいぶ情勢は悪いらしい。それで、ぼくは翌日内務省へ行つて当時の情報局長は知人じゃなかつたけど名前を聞いて知つてたからどうなんだと聞いたんです。そしたら、情報局長の返事は矢内原さんはやめればそのままでもいいけれども、もしいけば引っぱるようになるとうことだった。これは大変なことだと思つた。あの当時のことですから、情報局長がそう言うのならそうなるに違いないと思つたから、翌日矢内原がやつてきたのでそのことを伝えたくです。ぼくはまずいことを伝えただけでも(笑い)、それが非常にショックだったらしい。ぼくの親類の者が自由が丘に住んでいて、駅なんかで矢内原さんに会つても非常に沈んでいるということを聞きました。

「大内兵衛君やなんかも引っぱられた」とは、三谷隆信の記憶に、前後関係の誤りがあるものの、矢内原事件二ヶ月後の一九三八(昭和二三)年二月一日、大内兵衛・有沢広巳・脇村義太郎らが治安維持法違反の容疑で逮捕されたことを指す。いわゆる人民戦線事件の第二次検挙である。この時土方成美は、教授会に大内の即時休職を

提案したが、河合榮治郎らの反対のため否決された。が、同年十二月、大内らは起訴されたことで休職処分となる。

さて、矢内原忠雄にも生活がある。妻子がいる。面倒を見なければならぬ藤井武の子ども五人もいる。引つ張られると、数ヶ月の留置場生活を覚悟しなくてはならぬ。自分が東大教授という肩書きと給与・研究室その他もろもろの権利を放棄するならトラブルは回避される、そう思うと彼はすぐに相談にきてくれた大内兵衛と舞出長五郎を前にして、辞表を書く。

「退官願」は「昭和十二年十二月一日」の日付で、「内閣総理大臣公爵近衛文麿殿」に宛てられている。それは長与総長に提出された。日本の大学での「退官願」は、普通ならば教授会の同意を得て、学部長を通して総長（学長）に出すのが筋だが、学部長の土方成美を通さずに、直接総長に出したところに忠雄の抵抗の意地があった。前述のように、十二月二日の授業が最終講義となる。退職辞令は四日に出た。「東京帝大教授 矢内原忠雄／依願免本官」という簡単なものである。以後しばらくの間（一九四三年春頃まで）、東京帝大図書館が忠雄の研究室となった。

大学を辞めて、忠雄ははじめて「いかに自分が研究室を愛していたかということを意識した」という。大学は自分の家のようなもので、辞表提出後も図書館の一室を研究室として論文や翻訳に携わり、昼には自然に足が向いて参上御殿の食堂に昼食を食べに行く始末だったという。小野塚喜平次前総長は、君は破廉恥なことで大大学を辞めたのではないから、これからもやってきたままといい、文学部の桑木巖翼教授も自分の席を立て、一言慰めてくれた。「私は非常にそのことを感謝して今なお両先生の恩情を忘れない」と忠雄

は回想している。孤立無援の忠雄には、二人のことばは、よほど嬉しかったのであろう。

矢内原忠雄の東大教授の辞任は、世界的な反動の嵐の中での出来事であった。台頭する右翼勢力、それに結託した軍部、学内の土方成美や本位田祥男ら時代迎合者、―彼らとこれ以上同じ職場にあって闘うのは無理という判断が、忠雄の中に次第に芽生える。すでに何度か取り上げた荻田胸喜らの『真理と戦争…東京帝大教授矢内原忠雄氏の「真理と戦争」の批判に因みて』が出たのは、この年、一九三七年十一月一日である。この日付は奥付によるものだが、実際には十月下旬には印刷・刊行され、各方面にばらまかれたに違いない。

忠雄は原理日本社刊の右の本を手にし、悪意に満ちた内容のひどさにあきれ。自己顕示欲と酔いしれたような文章は論外だが、恐いのはこうした狂信的考え・理論が、右傾化を強める時代風潮の中で、一般の善良な市民にも受け入れられてしまうことだ。世間の人々は実情を知ることもなく、国の方針に反した著作を書き、東京帝国大学の教授職を追われたというだけで、矢内原忠雄を白眼視した。東京目黒区自由ヶ丘の自宅周辺の人々も矢内原忠雄を非国民とみなし、敬遠した。当時の時勢にあつては、致し方なかったとはいふものの、忠雄は寂しかった。後年の回想の一つに、次のようなものがある。

余談でありますけれども、東京で私の家の隣人が往来で私を見ると、文字通り「避けてのがれる」でありまして、私の姿を見るとほとと横丁に入ってしまう。入る横丁がなく、擦れ違う時には横を向いて通ってしまう。これは私を誘っているわけでは

ないけれども何となく気まずいんでしよう。自分を敵とし自分を誇るものがそういう態度をとるとすれば、随分気持ちが悪いです、辛いことです。

忠雄はただ辛かった。近所の人々はむろんのこと、この評伝の第一章で紹介した、郷里今治の富田小学校時代の幼友だち窪田佳津見でさえ、「昭和十二年、忠雄さんの著書が反戦的だと軍部にいらまされて、東大の教壇を去られたとき、私は忠雄さんに「君はお父さんから子供のとき毎日きかされた忠孝の訓えを忘れたのか、私は亡き小父さんや小母さんに御気の毒で申訳ない、君がいまのような考えでは残念ながら絶交する」というような手紙」を出している。忠雄は東大を追われ、世間からは誤解され、幼なじみの友まで失うことになる。しかも彼を擁護する声は少なかつた。

彼は孤独だった。寂しかった。眠れない夜が続く、体重は落ち、目はくぼんだ。体調はきわめて悪くなる。下痢が続く、歯痛が襲う。こうした中で、本論でしばしば述べた、若き日の純情さや、冗談を言っては回りを笑わせる社交的気性は次第に失せ、寡黙で厳格な、気むずかしい性格が次第に形成される。容貌もきびしさを増した。東京目黒の今井館資料館には、ご遺族から寄託された忠雄の写真が多数ある。わたしは資料館の福島穆あづささんに当時の忠雄の写真を見て貰ったが、この頃から忠雄の髪は薄くなり、顔の皺が増えている。

事件前までは、鼻下に髭をたくわえ、髪も豊かで、壮年学徒の雰囲気が見られるが、事件後は早老の学者の風貌である。顔はきびしくなり、目つきが若き日とはまったく異なる。人はかくも変わる

ものかと思わせるような変わり方であった。然もありません、回りはすべて無理解者の集団である。退職当時、忠雄には周囲がすべて敵に見えた。彼の腹立たしい思いは、打ち消しがたいものがあつた。教授会での土方学部長の尊大な役者めいた言動、それに追従する何人もの経済学部教授会メンバーのしたり顔。彼はやり切れない思いに駆られていたのである。

事件のきっかけとなつた葦田胸喜の尊大で、居丈高な文章が、頭に浮かぶ。「然しながら矢内原氏は、その思想内容の断じて放置せらるべからざる反国体性を措きて、単にその思想、法、学、術、方、法、論、人、生、観、だ、け、か、ら、い、つ、て、も、そ、れ、が、余、り、に、も、幼、稚、低、級、に、し、て、致、命、的、誤、謬、を、含、む、も、の、で、あ、る、と、い、ふ、点、の、み、か、ら、し、て、も、帝、国、大、学、教、授、た、る、資、格、な、き、も、の、で、あ、る」(傍点葦田)という一文など、許せるものではなかつた。しかも、重ねて言うが、ファシズム支配体制の中では、こういう言い方が許容され、特に「反国体性」などというキャッチ・フレーズによる攻撃は、追従者を生むものなのである。忠雄は「帝国大学教授たる資格」とは何かを逆に問いたかつた。

けれども、矢内原忠雄は葦田胸喜のあくどい口口に直接反論してない。同じ土俵で論じ合うことなど出来ない下劣さを、その反感に満ちた、拙い文章に感じたからであろう。彼は賢かつた。葦田に反論し、論争するほどの意味はないし、第一、時間がもつたいたいばかりである。反論することは、彼には野暮な行爲と見なされたのである。そうではあつても、一歳年下の右翼思想家葦田胸喜によつて、自己の尊厳が蹂躪された思いは、拭い難いものとして残つた。してやったりという得意顔の葦田胸喜を思うにつけ、心がうずいた。が、反論してもわかる人物ではない。そういう人物を相手に

しても、逆に自分が傷つくだけだと記憶の外に追いやり、彼は新たな仕事に邁進することになる。聖書に寄って立つ彼は、「復讐」は神のすることとして、自ら反論することを極力押さえた。これは正しい選択、歩みであった。なお、矢内原事件を追った文献は極めて多いが、忠雄がこの事件によっていかに傷つき、その性格までが変わってしまったことに言及したものは、この後に引用する矢内原恵子「身近にあった主人のこと」<sup>21)</sup>があるのみである。

東京帝国大学の教授職を辞めた数日後、矢内原忠雄の許に岩波書店の岩波茂雄が訪れ、金一封をそつと置き、新しくはじめる岩波新書に、アブラハム・リンカーンの伝記を書くよう勧めた。これは忠雄にとつてありがたい申し入れであった。東大在職中の彼の出版物は、それなりに売れた。が、辞任以降は予想がつかなかったからである。物書きとして本が出せないことほど辛いことはない。彼が辞任後出した本に『民族と国家』(一九三七・一二)があるが、これは自費出版である。そうした折の岩波からの申し入れゆえ、彼には嬉しかった。忠雄はリンカーンだけでなく、エレミヤ・日蓮・新渡戸稲造を加えて、『余の尊敬する人物』<sup>22)</sup>を書くことになるが、巻頭の「エレミヤ」の章には、『旧約聖書』の預言者エレミヤに当時の彼の悲憤の思いが託されることになる。

忠雄は言う。「エレミヤは決して円満な人間ではありません。彼に欠点がありました。その最大欠点は、おそらく敵に向つて激語を浴せかけた事でしょう。併し彼の激語は虚偽よりは恕すべき欠点です。彼は怒によつて敵をつくつたでせう。彼の憎悪を増したでせう。併し悪を怒ることの出来ない打算家よりは、彼の方が愛すべきではありませんか」<sup>23)</sup>と。そういえば忠雄も「私は教授会の席上、あ

まりのことに同僚教授を面責罵したことも時にあつた」という。彼はここでエレミヤに自己を投影する。そして自らをエレミヤに、蓑田胸喜をニセ預言者パシユル、ハナニヤの輩に擬して、次のように言う。

真理を愛して、真理の戦に倒れたる汝エレミヤよ。汝の生涯は敗北の生涯であつた。汝は国民に踏み付けられ、婦女だちに嘲笑されつつ悲哀の生涯を閉ぢた。併し汝によつて真理は今日に維持せられたのだ。而して真理と共に、汝は永遠に勝つたのだ。卑怯なること蓑虫の如く、頑固なること田螺の如く、胸に悪意を抱き、人を陥るを喜とする汝らパシユル、ハナニヤ輩よ。エレミヤを非愛国者として誣告し中傷し迫害したる偽預言者、偽政治家らよ。彼の言に聴き従はず、彼をして悲憤の涙を飲ましめたる国民よ。汝らこそ真理を紊し、正義を破壊し、国に滅亡を招いたのである(傍点著者)。

矢内原忠雄は、文章表現に秀でた詩人的資質の豊かな学者であつたことは、すでに何度も言及した。神戸一中時代から彼の文章は、超一流であつた。彼のそうした側面をうかがわせるに足る『通信』や『嘉信』に載つた詩歌は、現在『矢内原忠雄全集』第十七巻に収録されている。右の文章は、文学的資質を持った彼の一面が、見事に発揮されたものとなっている。忠雄も人の子である。直接反論しなくとも、彼はきちんと蓑田胸喜を斬つていた。

解説を加えよう。「真理を愛して、真理の戦に倒れたエレミア」の生涯は、「敗北の生涯」であつた。けれども、真理は、エレミア

によって維持されたのである。それに対して、蓑虫のように卑劣で、田螺のように頑固で、胸に悪意を抱いて、人を苦境に貶めるのを喜びとする卑怯な人間がいる。彼は学者を名乗って人を裁く、やりきれない存在の「偽預言者、偽政治家」である。

右に引用した文章の当該箇所を傍点を振ったが、蓑田胸喜の姓名を四つに引き裂いて文章に織り込ませる技法は、尋常でない。また、その底に流れる憤激は読者を捉える。忠雄はやり切れない気持ちをおさねりにひねって、「エレミヤ書」の人物に転位しているのである。それはストレートに蓑田胸喜に反論を書くよりも、はるか有効な文学的営為であった。

岩波新書の一冊である『余の尊敬する人物』は、太平洋戦争開始の前年である一九四〇（昭和一五年）五月、蓑田胸喜が未だ猛威をふるっていた頃の刊行であった。この狂信者に同じ土俵での闘いを仕掛けても意味がない。そこで忠雄は、右のような文学的やり方で蓑田を「筆誅」したのである。ちなみに蓑田胸喜は、日本が戦争に敗れた五ヶ月後の一九四六（昭和二一年）一月三十日、精神に異常を来し、故郷の熊本県八代郡氷川町で首つり自殺した。哀れな末路であった。

蓑田胸喜に踊らされた右翼エスピゴーンは、矢内原忠雄を国賊と称した。国賊とは、国を乱す者、体制に対する反乱を企てる者を言う。一体何時自分が国を乱し、反乱を企てたというのか、自分は日本のことを誰よりも愛し、心配し、真実を語っているのに国賊とは何事か……。こんな理不尽なことがあつてよいわけがない。やりきれない思いは、忠雄を追いつ込んだ。考えれば考えるほど、おかし、ひどい。前述のように、彼は眠れない日々を過ごす。自分を追

いつめるため、「エレミヤ書」に出てくるバシユルやハナニヤのようなニセ預言者、ニセ学者、ニセ政治家が跳梁し、わが者顔に政界・学界・論壇を謳歌している。自分をやつつけるために、徒党を組んで国賊扱いする。

同じ職場で、近くにいた学部長土方成美などは、忠雄を護るどころか経済学部教授会を魔女裁判の場に仕立て上げようと、実に巧みに計画的に準備し、忠雄を追いつめた。土方の言動を思い出すにつれ、彼は腹が立った。あの時、もっとよく考えて反撃すべきであったのに、この思いも胸をよぎった。彼は精神的に、神経的に痛めつけられたのである。彼にはすべての人間が敵に見えた。それは預言者の孤独であった。

一番近くにいた忠雄の妻恵子に、当時を振り返った前述の文章、「身近かにあった主人のこと」がある。そこで彼女は、「主人の若い時は子供にはまことに優しいお父様で御座いました。大学から帰りますと、毎日のように一家でそこにお散歩に出かけました。雨の降る日はお座敷の真中で子供達とドタンバタンとおすもうを致しました。またメンコもいたしました」と言い、以下のように書く。

満洲事変が起り大東亜戦争と化しまして、世の中が切迫するにつけ、主人の血相まで変りました。厳しい人となりました。激しい性質となりました。常に何ものかを睨みつけておりました。時には私の顔までが敵に見えるのではないかと思われました。私はその中であつて子供達を大変ふびんに思いましたが、どうにもならないので御座いました。未だに当時のことを思い出し、私は子供にすまなかつたと思っております。



主人は寂しかったので御座いました。独り荒野に立つ自分に誰れか一人味方がなければやりきれなかったので御座います。主人は決して強い人ではありませんでした。淋しがりやで優しいデリケートな神経質な人で御座いました。その主人をお動かしたかったのは神様で御座いました。イザヤのように、エレミヤのそうであつたように、弱い優しいその口に神様は火をなげ入れられました。

戦争<sup>なまら</sup>で国を挙げて勝利を謳<sup>うた</sup>う時、戦争の不正を、そして必ず日本が敗北することをちまたに叫びました。そうした時に疲れて家に帰ってどなりもしたかったです。なえた足をなげ出した事でした。今更ながらに思います。

恵子夫人のこの回想は、まことに貴重である。当時の人間矢内原忠雄を的確に観察し、捉え、発言している。事件は先にも記したように、矢内原忠雄という人間の性格・風貌までも変えてしまったのである。特に東大辞任直後がひどかった。子息の矢内原伊作は、当時の忠雄について、「ファシズムに対する戦いが熾烈の度を加えるにともない、ますます父は心身を勞し、神経質になり、不機嫌になり、「こわさ」を増した。父は些細なことでもしじゅう母に文句を言い、あたりちらしていた」という。また、次男の光男は、その頃の「恐かった父」を、「随分叱られたものです。家から放り出されたり、手を縛られて浴室に閉じこめられたり叩かれたり……」と回想する。今なら児童虐待として、訴えられても仕方ないことまで、矢内原忠雄は行っていたのである。彼もやはり弱き一人の人間であつただのだ。

忠雄は、恵子夫人が言うように、「独り荒野に立つ自分に誰れか一人味方がなければやりきれなかったので御座います」ということになる。若き日の純情で、やさしかった忠雄の性格は次第に失われ、家にいることの多くなった彼は、ふさぎ込み、口やかましい父親となった。それは三人の子ども（伊作・光雄・勝）にとっては、こわい、こわい存在の父として映った。また、弟子たちからは、きびしく厳格な師表として畏られた。忠雄は動揺の中で生きていた。神の教えの理想に生きることを願った彼は、時代の現実と誰よりも激しく衝突せざるを得なかったのである。妥協の道はなかった。それゆえの苦悩は大きかった。

彼の性格は完全に変わってしまったのである。それはすべての繋縛から自由になった敗戦後の生活に於いても、簡単には戻らないものがあつた。彼は正義と信じたものからは、一步も引かない妥協なき厳格な人となった。それは東大総長時代の学生運動対策にも及ぶこととなる。後述する矢内原三原則などが該当する。妻の恵子は、「激しい性格」となった忠雄に辟易した。が、彼女はそうした夫の気持ちを理解し、支えた。恵子は理想的賢夫人だったのである。

絶望の中で彼は神に祈り、問いつめた。このやりきれなさ。自分が何をし、どんな罪を犯したというのですか。日本のために真実を叫んで何が悪いのですか」と。彼は植民地論の研究者として、帝国主義日本の台湾・満洲・朝鮮・樺太・南洋群島などの統治方法に疑問を呈し、戦争の間違いを言い、日本の敗北を預言者のように叫んだ。時代の為政者が、職場の学部長が、同僚が、旧友・知人が、加えてマスコミが、近隣の人までもが、彼を非国民呼ばわりした。幼なじみの友だちまでもが彼を批判し、「絶交する」という手紙を

寄越した。回りがすべて敵に見えたのも当然である。そうした中でも彼は真実を叫んだ。それは旧約の預言者が、そして、洗礼者ヨハネが、イエス・キリストが荒野で叫んだのとどこか似ていた。苦しき、切なく、さらには腹立たしさが彼を駆つた。

#### 四 荒野に叫ぶ

東京帝国大学経済学部を辞任した矢内原忠雄は、兼任していた第一高等学校の非常勤講師も解任された。そのため矢内原家の家計は、一時苦しかった。妻子四人に加え、義兄藤井武の残した子、五人の養育もあったからである。彼は生活を如何にすべきかに思いをめぐらす。一九三七(昭和一二)年の『東京朝日新聞』(縮刷版)をめぐっていたら、十二月二十日の社会面に「筆禍転じて 古本屋さんになる矢内原氏」の見出しでの、忠雄の写真入り記事が目にとまった。そこには、「筆禍事件で辞職した東大経済学部元教授矢内原忠雄氏は目黒区自由ヶ丘の自邸にひきこもり読書と思索に紛らしてゐるが、最近氏の学友らが氏の念願たる学生ホーム兼古本屋を本郷に開設してやらうといふ話が進められてゐる」とあり、取材した記者に忠雄が以下のように語つたとある。

古本屋の事ですが、私はネ、前から喫茶店のついた学生ホームといふ形の古本屋を大学正門前附近に欲しいと思つてゐたんです。学生の読書の相談をしたり話し相手になつてやつたり……カサカサした今の学生生活に少しでも潤ひを与へてやりたい

のです、学生の安息所があつてもいいと思ふのです。……もとより処世的には拙劣な、金のない僕の事ですから、ラスキン文庫の様な事は勿論、これも一つの夢想として終つてしまふかも知れませんが……大学を辞めてから痛切に感じたこと「研究は続けたい、家族は養はねばならない」といふ事です……

この記事の書き手は、直接忠雄に取材して書いているから、これは単なる噂ではない、信頼できる記事である。忠雄は大学辞職後、一時はこの記事に見られるような古本屋の開業を真剣に考えていたのである。忠雄に会つて、その談話をまとめた『東京朝日新聞』の記者は最後に、「語る氏の横顔には深く「生活の翳」が刻まれてゐた」との実感のこもつた一文を添えている。定職を失つた矢内原忠雄は、今後の生活を如何にすべきかを真剣に模索していたのである。恩給(年金)だけでは、とうてい生活できない。

矢内原忠雄に師事した藤田若雄の『矢内原忠雄 その信仰と生涯』<sup>28</sup>には、「大学を去つた矢内原は、これまでの三百円家計を百円家計(恩給七十円、著作収入三十円)にきりかえることを妻恵子に命じ」とある。これまでの三分の一の金額で、家計をやるようにということだからかなりきつい。恵子の苦労は人並みではなかつたらう。が、彼女は少しも文句を言わず、忠雄の言に従つた。後年、忠雄は回想し、「私の家内が少しもうろたえないで、家計のことについては神様が守つてくださるから必ずどうにかなる。こういうハッキリした信仰をもつて、うろたえなかつたということが、私にとつて大きな力でありました」と言っている。

東大辞任の年、矢内原忠雄はまだ四十四歳、翌一九三八(昭和一

三年一月二十七日の誕生日が来て、満四十五歳という年齢であった。健康は昔ほどではなく、かなり弱ってきたといえども、休養をとればなんとかなる。世間的にも四十代は働き盛りである。彼は物書きとして再出発しようと思った。もとより彼は書くことが好きだったが、定職としての大学教授時代は、授業や会議、研究出張などに精力を奪われ、書くことの時間が不足していたのは否めなかった。そうした時に起こった退職という事件は、彼に膨大な自由時間と書くためのエネルギーを与えることになった。

彼はまず、恩師新渡戸稲造が英文で発表した『武士道』を翻訳、岩波文庫の一冊として刊行（一九三八・一〇）した。これも岩波茂雄の好意から出た出版であった。『武士道』は、新渡戸が一八九九（明治三二年）十月、アメリカ滞在中に英文で書いて出版したもので、明治時代に櫻井鷗村が翻訳出版（丁未出版社、一九〇八・三）していたが、文語文で固い調子の訳文であったため、口語訳を試みたものである。忠雄は「訳者序」で、「櫻井氏の訳はなかなかの名訳である。しかるに私が敢えて新たに本書の翻訳を試みたる理由は、同氏の訳書がすでに久しく絶版であつて容易に見せられないことのほかに、氏の訳書が漢文漢字の素養の一層乏しくなれる現代日本人にとりて難解であることを恐れるのと、内容上の瑕<sup>きず</sup>もまた絶無と言へざるが故である」と記している。岩波文庫本『武士道』はよく売れ、平成のこんにちも、その改版が版を重ねている。<sup>②③</sup>

忠雄は並行して、伝道医師クリスティーの『奉天三十年』<sup>④</sup>の翻訳をはじめていた。前述のように、彼は『余の尊敬する人物』を岩波書店から先に頼まれていたが、その後、岩波から翻訳を先にしてほしいとの要望を受けて、急遽取りかかったのであった。それは岩波

書店刊行の岩波新書第一、二冊となる。上巻の「訳者序」で忠雄は、「私が本書を訳したのは、岩波茂雄氏の慫慂によつた。氏は本書を讀んでクリスティーの無私純愛なる奉仕の生涯に感激し、今や満洲及び満洲人に対し従来よりも遙かに大なる責任を取るに至りし我が国民に本書を提供し、以て満洲をして真に王道樂土たらしむるに資せしめようと欲せられたのである。而して私が敢て不慣れの翻訳を試みることを承諾したのは、満洲及び支那問題に就いて関心を有つ一人の学徒として、満洲及び支那伝道に対して興味を持つ一人の基督者として、並に私の父は医者であつたし、私の弟は現に同仁会医院の医師として長く支那青島<sup>チヤンキョウ</sup>で働いて居るといふ個人的関係によつたのである」と書いている。

訳書『武士道』と『奉天三十年』は、大学を離れた矢内原忠雄の最初の仕事としてふさわしかった。前者は恩師の著作、後者は彼の関心を持つ満洲奉天（瀋陽）が舞台で、そこに遣わされたスコットランド人医師の医療とキリスト教伝道の回想である。二つの仕事とも大学を辞めた忠雄が、その辞任にまつわる悪夢をぬぐい、打ち込む仕事としては、実にふさわしかった。後者には、満鉄奉天図書館長衛藤利夫の『満洲生活三十年・奉天の聖者クリスティーの思出』（大亜細亜建設社、一九三五・七）という訳書に等しい文献あつたことながら、よくぞやつたという感がある。

一九三八（昭和一三年）の夏は、山中湖畔<sup>やまのうみ</sup>梁尻<sup>やまじり</sup>の別荘で、これら翻訳の仕事に集中した。当時矢内原家に寄寓していた藤井偕子<sup>ともこ</sup>（藤井武の長女）が炊事係として随行した。偕子の回想「叔父の面影」<sup>⑤</sup>に、「昭和十三年の夏山中湖畔の家で『奉天三十年』の翻訳にとりくんで居た時、私は炊事係として随行したが、朝食後間もなく机の

前に端座して仕事にかかる、それこそ食事時間以外は脇目もふらずに精励した。その真剣な気迫と集中ぶりには、見ている私の方まで気疲れするほどだった」とある。

東大を辞任してからの矢内原忠雄は、『藤井武全集』の再刊や、個人誌『嘉信』の刊行に力を注ぐことになる。が、当初の主要な仕事は、生計を維持するための翻訳と、『余の尊敬する人物』という、四人の人物(エレミヤ・日蓮・リンコン・新渡戸稲造)の評伝の執筆であった。後者は題名が魅力的で、時代の閉塞感にとらわれていた人々に訴えるものがあつた。特に巻頭の「エレミヤ」は、古代イスラエルの預言者エレミヤの生涯を描き、そこに当時の苦しい忠雄自身の思いを込めたものとなつたことは、すでに述べた。

エレミヤとユダ王国のことを書きながら、忠雄は戦争に突き進む日本と、悲哀のどん底にいる自身の姿を重ねる。「愛する国の運命は、エレミヤの心にあります大なる問題となりました。神はこの国を滅し給ふのであらうか、救ひ給ふのであらうか、滅亡の徴候は明かに見えてある。かくも神に背き正義を押し枉げて居ては、表面を如何に飾つても、内部は欠陥と腐敗に満ちて脆弱そのものであるが故に、外部よりの少しの圧力を以て国は崩壊せざるを得ないであらう」の一節など、矢内原忠雄のここ二、三年前からの日本への思いと何と重なって見えることか。彼は自身の想いをここに転位しているのである。近代日本のエレミヤ矢内原忠雄の面目躍如といったところか。それは検閲を逃れ、真実を語る見事な文学的方策でもあつたのだ。

後年忠雄は『私の歩んできた道』で当時を回想し、『奉天三十年』も、『余の尊敬する人物』も相当部数出まして、私の生活をさ

さえてくれるものになつたのです」と言っている。岩波新書は矢内原忠雄のこれらの翻訳や評伝を盛るにふさわしい新しい書物形態(173×105 mm)でもあつた。新書判はそれまで古典を中心とした岩波文庫に対し、書き下ろしを中心に話題性を売りにした編集として出発した。岩波新書のモデルとされたのは、前年の一九三七(昭和一二)年にイギリスで創刊された一般教養書シリーズのペリカン・ブックスである。このような新しい革袋を得た矢内原忠雄の三冊の岩波新書は、自身「私の生活をささえてくれるものになつた」というほどよく売れた。彼は伝道に専念することができ条件を得たことを神に感謝した。けれども出版による収入は、一時的なものであり、定職としての東大教授時代の給与に較べると、ならすならやはり少なく、忠雄一家の生活は、儉約を余儀なくされた。

個人誌『嘉信』は、東大教授を辞任した翌月の一九三八年一月の創刊である。「人生の転機」というエッセイで、忠雄は「先年私が東大を去つた時(一九三七年)は、私の為すべき事がすぐにはつきりと示された。私はそれまで不定期・非売品であつた「通信」の代りに、月刊雑誌として「嘉信」を創刊したのであつた。／今度は私は何をなすべきか。東大の任期が満了する前から、私は時折考へた。そのあかつきには「嘉信」を毎月百ページ位の大雑誌にして、聖書の講義や、信仰問題の解明や、古典の研究や、時事についての預言などを満載し、これまで紙面が狭いために消化しきれなかつた原稿をどしどし発表しよう」(引用は初出の『嘉信』による)と書いている。誌名の『嘉信』とは、「嘉き通信」、または「信仰を嘉す」、さらには双方の意をこめての命名であつたのではないか。書く内容はいくらもあつた。が、雑誌発行の経費のことを考えると、理想の実現

は難しい。そこで無料配布の『通信』を『嘉信』と名を変え、三十錢ほどの低額で、定期刊行するだけでも善しとした。『嘉信』は以後、近代日本のエレミヤ矢内原忠雄の、重要な発言舞台となっていく。それは内村鑑三の主張した「紙上の教会」の役割を果たすものともなった。『嘉信』に関しては、次章(第十章の二)で詳説する。

他方、彼は家庭集会や公開聖書講義、それに各地への伝道旅行にも力を注いだ。キリスト教で言う家庭集会とは、一家庭で行われる聖書研究を中心とした集会を指す。矢内原家での家庭集会は、大森時代に台湾の留学生二名を対象に開いていた。それは陳茂源「大森の家庭集会の頃」<sup>⑤</sup>を通して知ることができるが、自由ヶ丘に転居してからは、自然消滅していた。それが渡部美代治という青年の願望で新たに開かれることになる。渡部の回想「自由ヶ丘家庭集会の頃」<sup>⑥</sup>に聞こう。

私はすでに自由ヶ丘に転居しておられた先生のお宅を訪ねて、先生の教えを受け度い旨、率直にお願いしたのである。先生は私如き者の願いを入れて集会を開いて下さることになった。これが自由ヶ丘家庭集会の始めでありました。そのメンバーは先生の奥様と三人の御子様、及び藤井先生の御子様方、それに私と妻、野津樸君とであった。其後次々と兄弟姉が加えられ、昭和十二年頃は二十名余りとなった。先生は「この集りは、内村先生記念講演会の産物であって、単に起源に於てだけでなく、その精神をも受け継いだものである」と後に記して居られる(『葡萄』五号所載「思ひ出」)。

集会では、始めに全員の聖句の暗誦が課せられた。各自の暗

誦が終る毎に、大きく「ウン」とうなずかれたり、つまると「ヨシ、次」と先生の応答があった。これは師と弟子との真剣なやりとりであって、私どもはこれによって聖書を生きて把握することを教えられたように思う。先生の聖書講義は、いわゆる訓詁注釈ではなくて、生ける神の言として説いて下さった。イザヤやエレミヤは先生を通して、現代に語りかけるイザヤやエレミヤであった。そしてイエスは、現代の学者、パリサイ人と激しく戦い、顔を堅くエルサレムに向けて進むイエスであった。私どもはイエスの十字架によって先生の十字架を理解し、先生の十字架によって、イエスの十字架を一層深く知ることが出来たように思う。先生の大学辞職はまさに十字架だったのである。

矢内原忠雄の大学辞職は、「まさに十字架だった」という渡部の評は正しい。忠雄は十字架を負って、家庭集会に精を出す。集会は日曜日の午前十時から十二時まで、二階の八畳と六畳の部屋のみずまをはずして行われた。忠雄は家庭集会に全勢力を注ぎ込んでいたのである。自由ヶ丘の家庭集会への出席者は、忠雄が「思ふ存分叱り得る」ことのできる、彼よりも「十年以上年齢の若い者」が厳選された。その上に集会への出席には、「両親の許諾」が要求された<sup>⑦</sup>。当時、この家庭集会に参加していた奥山清四郎に、ある夜、忠雄から呼び出しを受け、自由ヶ丘の矢内原家で厳しい詰問にあったことを書いた一文がある。その一節には、忠雄の弟子をしごく様子が精細に回想されている。そこには「スタンドの明かりをうけて闇に浮ぶ容姿のもの凄さ、眼は縦につき、眼光は針のよう、しごくペー

パーナイフは降魔の剣か、隙をゆるさない剣幕でした」とある。忠雄は真剣だったのである。

西村秀夫によると自由ヶ丘家庭集会は、「彼にとつて単なる伝道・教育の機会というよりも、むしろ青年と共に祈り、聖書を読む、神の霊をうける機会であり、戦闘の小集団、戦うエクレシヤの形成の機会となった」のだという。忠雄自身の回想には、「自由ヶ丘集会は昭和八年春から始まった。最初は渡部君、野津君たち三、四名藤井武の遺児たちと、私の家族と、すべてで十二、三名であった。その後一人二人と入会を希望するものがあつて、昭和二十年の暮に解散した時には、私の家の二階二室の収容し得るだけの最大の人数になり、二階が抜け落ちはしまいかと心配されるほどであった。四十二、三名も居たであらうか」とある。忠雄の三男矢内原勝の「自由ヶ丘家庭聖書集會について」<sup>①</sup>にも、「二階が落ちなかつたのは、私には神の恩恵としか思えない」との証言がある。

家庭集会のほかに、忠雄は月一回お茶の水(神田駿河台)の基督教女子青年会(YWCA)で、公開聖書講義を行い、また、毎年七月下旬には山中湖で聖書講習会を開いた。山中湖での集會の内容は、現在『山中湖聖書講習会講話・講演・感想』<sup>②</sup>に見ることができ、巻頭の「人物論」一、二と、「満支旅行談」一〜三が特におもしろく、全集の欠を補う。さらに一九三九(昭和十四)年からは、土曜日に土曜学校を開くようになる。戦中の矢内原忠雄にとつて重要な意味を持つ土曜学校のことは、次章(第十章の二)で取り上げる。講演旅行にも招かれるまま、しばしば出かけた。行き先は日本の各地にとどまらず、外地の朝鮮・満洲・北支に及んだ。一九四〇(昭和一五)年八月の朝鮮行は、特に重要だった。一ヶ月ほどの旅の途次

では、京城基督教青年会館で「ロマ書」の講義を行っている。それは次章(第十章の二)で取り上げることにする。矢内原忠雄は、きびしい時代の中でキリスト者としての自己の信念・立場を放棄することなく、荒野に叫ぶ預言者のように突き進んだ。

注1 竹内洋「大学という病 東大紛擾と教授群像」中央公論新社、二〇〇一年九月二〇日。なお、この本の文庫版(中公文庫、二〇〇七年七月二五日)には、初版にはない詳細な人名索引と事項索引が付いていて便利である。

2 将基面貴巳「言論弾圧 矢内原事件の構図」中央公論社、二〇一四年九月二五日

3 鴨下重彦「昭和初期からの風雪の人」鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編「矢内原忠雄」東京大学出版会、二〇一一年一月二日。二七ページ

4 矢内原忠雄「戦の跡」『嘉信』第八卷第一二号、一九四五年二月、『私の歩んできた道』東京大学出版会、一九五八年三月三一日所収。のち「矢内原忠雄全集」第二六巻収録、一〇四ページ

5 今泉裕美子「南洋群島研究」鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編「矢内原忠雄」東京大学出版会、二〇一一年一月二日。一三〇〜一六二ページ

6 篠田一人「無教会主義キリスト者の抵抗 藤沢武義を中心として」同志社大学人文科学研究所編「戦時下抵抗の研究I」みすず書房、一九六八年一月一〇日。五〇〜五九ページ

7 矢内原伊作「若き日の日記 われ山にむかひて」現代評論社、一九七四年五月二五日。九ページ

- 8 黒崎幸吉「式辞」『清き岸べに』嘉信社、一九六二年六月二五日。六一二ページ
- 9 矢内原忠雄「落飾記」『通信』第32号、一九三六年三月、のち『矢内原忠雄全集』第一七巻収録。四六ページ
- 10 矢内原忠雄「私の歩んできた道」東京大学出版会、一九五八年三月三一日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。四八ページ
- 11 矢内原忠雄「大学卒業から大学辞職まで」『通信』終刊号、一九三七年二月、「大学辞職の日」と改題、「私の歩んできた道」東京大学出版会、一九五八年三月三二日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。九二～九三ページ。引用は初出『通信』終刊号による。
- 12 大内兵衛「矢内原君に別れる」『帝国大学新聞』一九三七年二月六日。のち『高い山―人物アルバム』岩波書店、一九六三年一月一日収録。一三四～一三八ページ
- 13 大内兵衛「矢内原教授辞任のいきさつ」『矢内原忠雄全集』月報17、一九六四年七月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯』岩波書店、一九六八年八月三日収録。二二一～二四一ページ
- 14 立花隆「天皇と東大 大日本帝国の生と死」『文藝春秋』二〇〇五年二月一日。三三九～四〇〇ページ
- 15 長崎太郎「佐々木惣一先生と私」私家版、一九七〇年六月一日。二二五ページ
- 16 矢内原伊作・川西實三・三谷隆信「座談会わが父わが友」『朝日ジャーナル』一九七五年三月二八日、のち矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年七月二三日収録。四五～五ページ
- 17 注11に同じ。五三～五四ページ
- 18 矢内原忠雄「詩篇」『矢内原忠雄未発表聖書講義 ヨブ記・詩篇』新地書房、一九八六年三月一日。二二五ページ
- 19 窪田佳津見「忠雄さんの追憶 竹馬の友」『矢内原忠雄全集』月報7、一九六三年九月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯』岩波書店、一九六八年八月三日収録。二八ページ
- 20 美作太郎「戦前・戦中を歩む 編集者として」日本評論社、一九八五年一月一日、竹中佳彦「日本政治史の中の知識人」(上) 木鐸社、一九九五年二月二〇日。竹内洋「大学という病東大紛擾と教授群像」中央公論新社、二〇〇一年九月二〇日、赤江達也「紙上の教会」と日本近代無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、二〇一三年六月二六日、将基面貴巳の『言論抑圧 矢内原事件の構図』中央公論社、二〇一四年九月二五日など
- 21 矢内原恵子「身近かにあった主人のこと」『矢内原忠雄全集』月報29、一九六五年七月二九日、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯』岩波書店、一九六八年八月三日収録。六六七～六七〇ページ
- 22 矢内原忠雄「余の尊敬する人物」岩波書店、一九四〇年五月三〇日
- 23 注22に同じ。五四ページ
- 24 矢内原忠雄「戦の跡」『嘉信』第八巻第二二号(一九四五年二月)、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一〇六ページ
- 25 矢内原忠雄「伝道旅行記」(初出は『嘉信』一九五六・二)、矢内原忠雄全集』第二六巻収録。六七二～六七三ページ
- 26 注7に同じ。五ページ
- 27 矢内原光雄「父」『矢内原忠雄全集』月報29、一九六五年七月二九日、

- のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。六六二～六六四ページ
- 28 藤田若雄『矢内原忠雄 その信仰と生涯』教文館、一九六七年二月二五日所収。四二ページ
- 29 矢内原忠雄「私の人生遍歴」NHK「人生読本」一九五八年二月二七日放送、「人生と自然」東京大学出版会、一九六〇年一〇月二五日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。二四五ページ
- 30 新渡戸稲造著・矢内原忠雄訳『武士道』は、矢内原伊作による改訳が、一九七四年一月八日に出、二〇一二年二月五日付で第九九刷が刊行されている。
- 31 クリストイー著・矢内原忠雄訳『奉天三十年』上・下、岩波書店、一九三八(昭和一三)年十一月二〇日、上下巻同時刊行
- 32 藤井偕子「叔父の面影」『矢内原忠雄全集』月報28、一九六五年六月一日、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。一九六八年八月三日。六五九ページ
- 33 注10に同じ。五七ページ
- 34 矢内原忠雄「人生の転機」『嘉信』第二二巻第一号、一九五八年一月、『私の歩んできた道』東京大学出版会、一九五八年三月三一日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一二七～一二五ページ
- 35 陳茂源「大森の家庭集会の頃」『矢内原忠雄全集』月報6、一九六五年七月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。一〇九～一一四ページ
- 36 渡部美代治「自由ヶ丘家庭集会の頃」『矢内原忠雄全集』月報1、一九六三年三月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。一七七～一八一ページ
- 37 矢内原忠雄「私の伝道生涯第四回自由ヶ丘集会」『橄欖』一九五四年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一九六〇年一九七ページ
- 38 奥山清四郎「あのころのこと」『矢内原忠雄全集』月報4、一九六三年六月、のち「あの頃のこと」と改題、南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。一八七～一九〇ページ
- 39 西村秀夫『矢内原忠雄』日本基督教団出版局、一九七五年七月一〇日。一三九ページ
- 40 注37に同じ。一九六ページ
- 41 矢内原勝「自由ヶ丘家庭聖書集会について」『矢内原忠雄未発表聖書講義 エゼキエル書』付報、新地書房、一九八四年三月三〇日
- 42 矢内原忠雄「山中湖聖書講習会講話・講演・感想」新地書房、一九九一年六月二〇日
- 受領日 二〇一五年九月二十五日  
受理日 二〇一五年十一月十一日